宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第68集

UWABEKIJOUKARABORIATO

上日置城空堀跡

一般県道日置南高鍋線地方特定道路整備事業（上日置工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第68集

UWABEKIJOUKARABORIATO

上日置城空堀跡

一般県道日置南高鍋線地方特定道路整備事業（上日置工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では，一般県道日置南高鍋線地方特定道路整備事業（上日置工区）に伴い，平成12年度に高鍋土木事務所の依頼を受け上日置城空堀跡の発掘調査を実施いたしました。

調査の結果，空堀跡の規模や構造上の特徴が明らかになるとともに，後期旧石器時代の文化層の存在や，それに続く縄文時代から近世・近代までの遺物も確認することができ，連綿と続いてきた人々の日々の営みの一端を垣間見ることができました。

特に，上日置城跡のように周辺台地の縁辺に築かれた小規模城郭を調査する機会を得たことは，その縄張り検討とあわせて中世社会における城郭の存在意義を考える上でも大きな成果となりました。

本書が学術資料として，あるいは学校教育や生涯学習の資料として 広く活用され，埋蔵文化財に対する認識や理解を深めるための一助となることを期待します。

最後になりましたが，調査にあたって御協力いただいた関係諸機関 をはじめ，御指導御助言をいただいた諸先生方，ならびに地元の皆様方に心より厚くお礼申し上げます。

平成15年３月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長　米　良　弘　康

例　言

1　本書は，一般県道日置南高鍋線地方特定道路整備事業（上日置工区）に伴う事前調査として，宮崎県教育委員会が実施した上日置城空堀跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。調査は，高鍋土木事務所の依頼を受け宮崎県教育委員会が主体となり，宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

2　上日置城空堀跡の発掘調査期間は，平成12年10月23日から平成13年1月30日である。

3　本書で使用した位置図は，国土地理院発行の２万５千分の１図『妻・佐土原・高鍋・日向日置』を，また遺跡の周辺地形図等については新富町作成の５千分の１図を基に作成した。

4　現地における実測図の作成は主として福田泰典，堀田孝博，日髙（旧姓橋川）敬子が行った。

5　空中写真撮影および自然科学分析はそれぞれ次の業者に委託した。

空中写真撮影　　（有）スカイサーベイ九州

自然科学分析　　株式会社古環境研究所

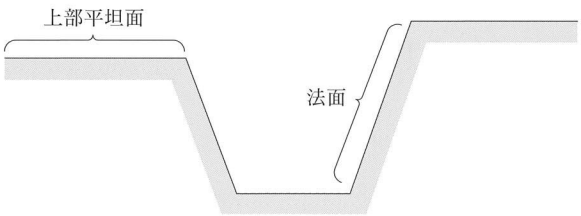
6　遺物・図面の整理は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面作成，遺物実測およびトレースは，福田と整理作業員が行った。

7　本書の執筆および編集は福田が担当した。また，使用した写真については，遺構等の写真を福田・堀田・日髙が，遺物写真については福田が撮影した。

8　本書で使用した方位は，座標北および磁北である。座標北を用いた場合は『G.N.』，磁北を用いた場合には『M.N.』と明記し両者を区別してある（遺跡が位置する宮崎県新富町上日置付近では磁針方位西偏約5°60′である）。なお，レベルは海抜絶対高である。

9　土器の色調および土層の注記は，農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に準拠した。

10　空堀跡の記述に関し，本書内で用いた呼称は右のとおりである。



11　上日置城空堀跡に関する遺物・実測図等は宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに
　第１節　調査に至る経緯…… 1
　第２節　調査の組織…… 1
　第３節　遺跡の位置と環境…… 2
第Ⅱ章　調査の概要
　第１節　調査の経過…… 4
　第２節　基本層序…… 4
第Ⅲ章　調査の記録
　第１節　中世の遺構と遺物…… 5
　第２節　旧石器時代の遺構と遺物…… 10
　第３節　その他の時代の遺物…… 16
　第４節　上日置城空堀跡におけるテフラ分析…… 25
第Ⅳ章　まとめ…… 28

挿　図　目　次

第１図　上日置城空堀跡および周辺遺跡位置図（S＝1/25000）…… 2
第２図　上日置城空堀跡周辺地形図（S＝1/4000）…… 3
第３図　第４トレンチ（T_4）土層堆積状況（S＝1/30）…… 4
第４図　上日置城跡縄張り図（S＝1/1000）…… 5
第５図　空堀跡平面図（S＝1/250）…… 6
第６図　空堀跡覆土状況実測図（S＝1/60）…… 7
第７図　堀底端部の造成に伴う土層堆積状況（S＝1/60）…… 8
第８図　空堀跡横断面図（S＝1/300）…… 9
第９図　上日置城空堀跡出土土師器・陶磁器実測図（中世　S＝1/3）…… 9
第10図　旧石器時代の調査範囲…… 10
第11図　土坑実測図（S＝1/40）…… 10
第12図　遺物分布状況（平面・垂直　S＝1/100）…… 12
第13図　遺物平面分布図（S＝1/80）…… 13
第14図　石器実測図１（S＝2/3）…… 14
第15図　石器実測図２（S＝2/3）…… 15
第16図　縄文土器実測図（S＝1/3）…… 16
第17図　弥生土器および古墳時代の遺物実測図（S＝1/3）…… 17
第18図　近世・近代陶磁器実測図（碗・皿・鉢　S＝1/3）…… 18
第19図　近世陶器実測図（擂鉢・鉢　S＝1/3）…… 19
第20図　近世陶器（壺・甕　S＝1/5）およびその他の遺物実測図（S＝1/3）…… 21

表　目　次

第１表　遺物観察表１…… 22
第２表　遺物観察表２…… 23
第３表　石器計測表…… 24

図　版　目　次

図版１…… 29
上日置城跡全景（西上空から）
上日置城空堀跡近景（北西から）
上日置城空堀跡全景（垂直）

図版２…… 30
上置城跡全景（垂直）
曲輪Ⅰ（主郭）の切岸
空堀跡法面の覆土除去作業風景
空堀跡法面の覆土状況（T_3付近）
空堀跡方面の覆土状況（堀底南東端部付近）
堀底南東端部の造成土堆積状況
堀底北西端部の造成土堆積状況（北西から）
堀底北西端部の造成土堆積状況（斜め上から）

図版３…… 31
土師器（小皿・坏）
土師器（左：内面，右：外面）
中世陶磁器（内面，擂鉢・青磁・染付・壺）
中世陶磁器（外面，擂鉢・青磁・染付・壺）
旧石器時代の調査範囲（垂直）
第４トレンチ土層堆積状況
石器等出土状況

図版４…… 32
土坑埋土状況
土坑空堀状況
空堀跡上部平坦面出土石器
接合資料１
接合資料２
接合資料３
接合資料４

図版５…… 33
縄文土器
底部一括資料（縄文土器・弥生土器・土師器）
弥生土器および古墳時代の土師器・須恵器
近世陶磁器（碗・広東碗・碗蓋・皿・鉢）

図版６…… 34
近世陶磁器（内面，碗・皿・鉢）
近世陶磁器（外面，碗・皿・鉢）
近世陶器（内面，擂鉢・鉢）
近世陶器（外面，擂鉢・鉢）
近世陶器（壺）
近世陶器（甕）
瓦（瓦当，軒丸瓦）
銭貨・土人形・金属製品

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

上日置城空堀跡は，宮崎県児湯郡新富町大字日置3470－17ほかに所在する。この空堀跡は中世の上日置城跡の一部を構成する空堀の跡であり，当県が実施した中近世城館跡緊急分布調査でも同町内で確認された8か所の城館跡のうちの一つに数えられており周知の遺跡としてすでに認識されていた。

日置南高鍋線の交通量の増加に伴う道路の改築および国道10号の慢性的な渋滞緩和を目的に一般県道日置南高鍋線地方特定道路整備事業（上日置工区）が計画され，平成9年高鍋土木事務所より県文化課に路線内の埋蔵文化財の有無の照会があり，路線内に所在する上日置城跡の取扱いについて協議を行った。その後，平成12年6月29日と30日の2日間，工事予定地に含まれる空堀跡，その周辺の確認調査を実施した。調査の結果，工事により遺跡に影響が及ぶことが確認できたため，文化課と高鍋土木事務所との間で協議を行い，現状保存が困難な範囲について記録保存のための発掘調査を行うことになった。調査は，高鍋土木事務所の依頼により宮崎県教育委員会が主体となり，宮崎県埋蔵文化財センターが平成12年10月23日から翌平成13年1月30日までの間実施した。

第２節　調査の組織

上日置城空堀跡　発掘調査（平成12年度）

宮崎県埋蔵文化財センター

所長	矢野　剛
副所長兼総務課長	菊地　茂仁
副所長兼調査第二課長	岩永　哲夫
総務係長	亀井　維子
調査第二課調査第三係長	菅付　和樹
同課調査第三係主査（調査担当）	福田　泰典
調査員（嘱託）	堀田　孝博
調査員（嘱託）	橋川　敬子

上日置城空堀跡　整理および報告書作成（平成14年度）

宮崎県埋蔵文化財センター

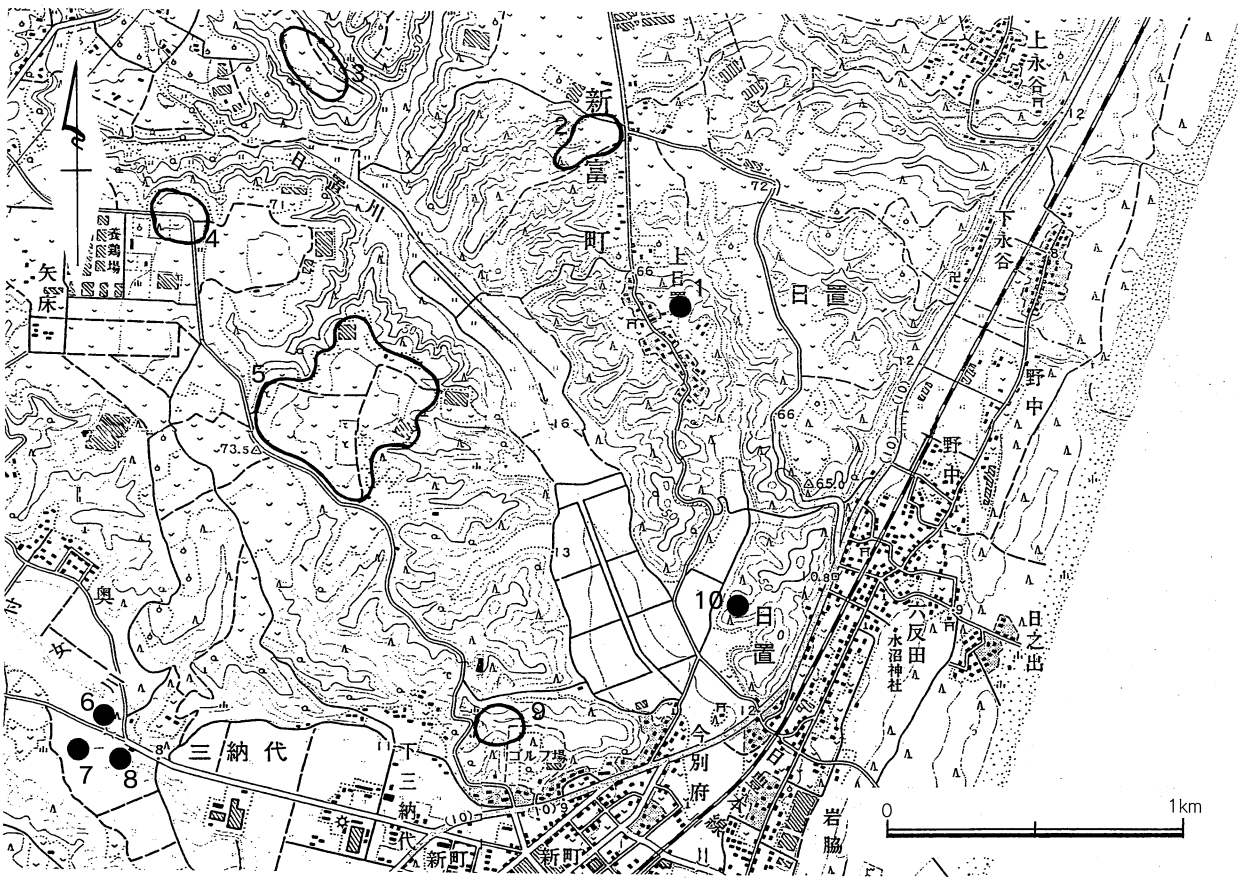
所長	米良　弘康
副所長兼総務課長	大薗　和博
副所長兼調査第二課長	岩永　哲夫
総務課総務係長	野邊　文博
調査第二課調査第三係長	菅付　和樹
同　調査第四係長	永友　良典
同　調査第三係主査	福田　泰典

第３節　遺跡の位置と環境

新富町は宮崎県の中央東部に広がる宮崎平野に位置し，北部にはなだらかに広がる洪積台地を，南部には九州山地に端を発する一ツ瀬川の氾濫原からなる沖積低地を擁する。また，日向灘に面した東部には海抜約5～10ｍの海岸砂丘や入江なども形成され地形の変化に富む。このうち，北部の大半を占める洪積台地は宮崎層群を基盤層としており，地形区分では茶臼原面（海抜約120～125m）・三財原面（海抜約80～90m）・新田原面（海抜約80～90m）に分けられている。

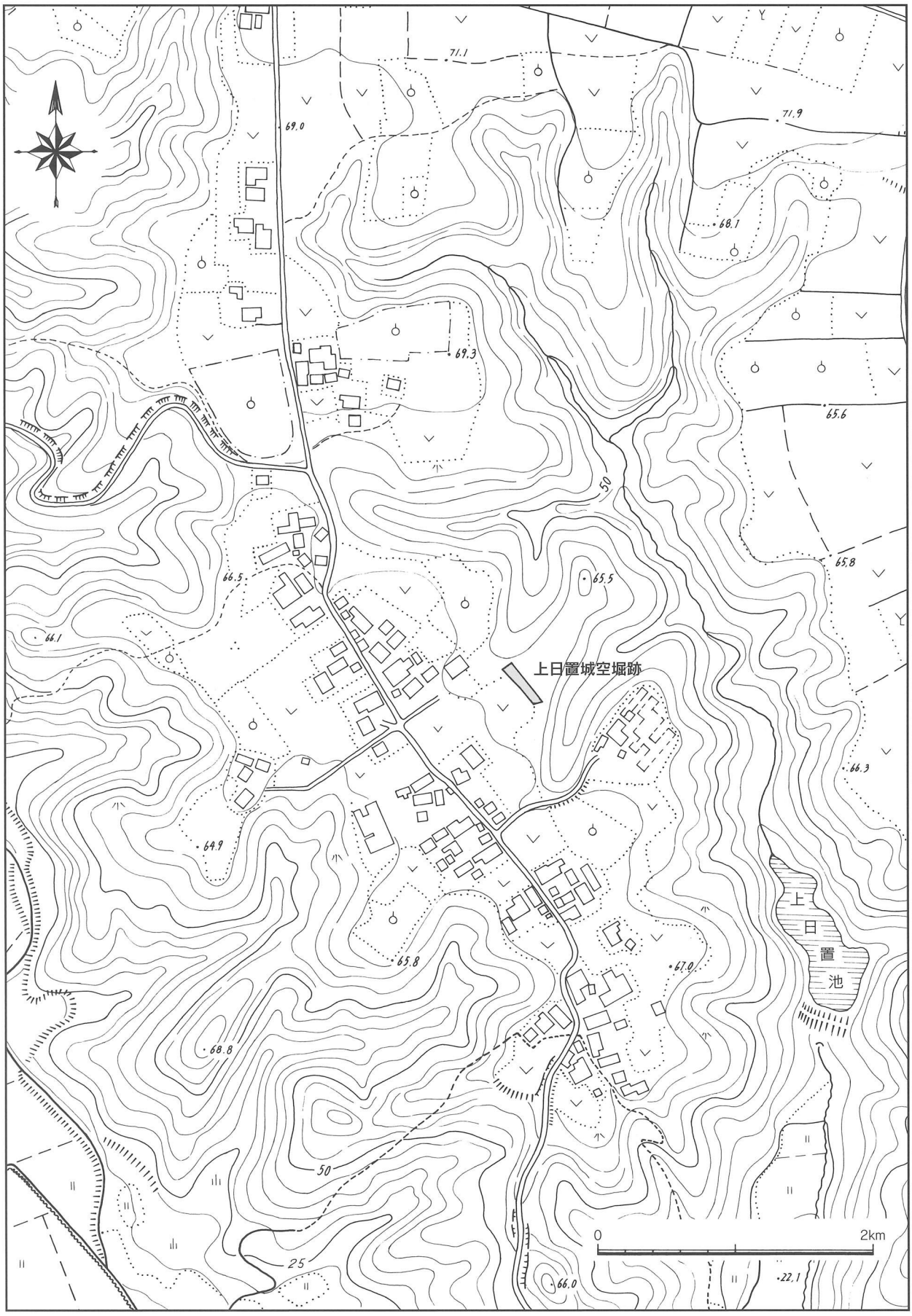
今回報告する上日置城空堀跡は，新富町の中心から北に約２㎞，新田原面に属する海抜70ｍ前後の平坦面が広がる台地の縁辺に所在する。開析谷により形成された舌状に張り出す台地縁辺部に築かれた上日置城を，その台地から隔絶し防御性を高めるために設けられた空堀である。新富町内にはこの上日置城の他にも，伊東氏が戦国期に日向一円に版図を拡大する拠点とした伊東48塁にあげられた「富田城」に比定されている上ノ城跡や下ノ城跡などがある。また，今回の調査区で確認された旧石器時代の遺物については，東九州自動車道建設に伴う発掘調査により良好な資料の蓄積が進んでおり，この洪積台地上の当該期の様相が徐々に明らかになりつつある。その他，周辺の遺跡として，弥生時代中期の住居跡やＶ字溝を検出した鐙遺跡，古墳時代の集落を確認した上薗遺跡，藤掛遺跡などがある。

［参考文献］『新富町の文化財　遺跡詳細分布調査報告書』　新富町教育委員会　1982
『新富町史　通史編』　新富町　1992



1　上日置城空堀跡　　2　藤掛遺跡　　3　小漆遺跡　　4　西牧遺跡　　5　上薗遺跡
6　頭田遺跡　　7　風早遺跡　　8　志戸平遺跡　　9　鐙遺跡　　10　越田遺跡

第１図　上日置城空堀跡および周辺遺跡位置図（S=1/25000）



第２図　上日置城空堀跡周辺地形図（S=1/4000）

第II章　調査の概要

第１節　調査の経過

上日置城跡および今回の調査対象となった空堀跡の遺構残存状況は良好であった。しかし，調査範囲は杉林であり，雑木等も繁茂していたためそれらの伐採および搬出を待っての調査となった。

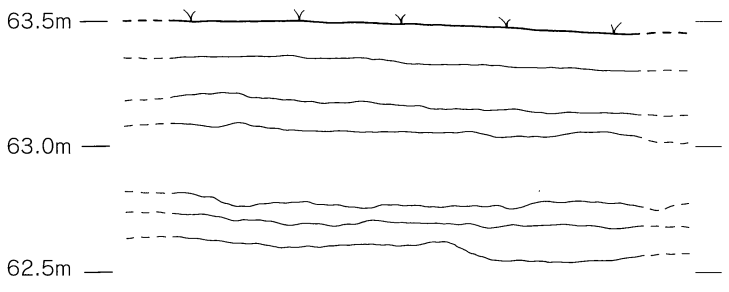
調査対象となった空堀跡は地表面観察でもその形状が概ね確認できたが，本来の形状を明らかにするために上端のラインに対して直交するトレンチを設定し，その覆土を除去する作業から着手した。およそ１週間で空堀法面の覆土状況を観察できる状態になりその図化作業を終え，法面全体の覆土を除去し空堀跡の旧状を確認することができた。その後，調査箇所を堀底両端部で確認されていた不自然な張り出し部分に移しその解明を急いだ。その結果，張り出し部分の拡張方向に合わせて設定したトレンチの土層堆積状況観察から，自然地形ではなく造成による拡張面であることが裏付けられた。また，旧石器時代の遺物を確認した第４トレンチ周辺（空堀上部平坦面）も遺物包含層の存在が確実視されたことから範囲を拡大して張り出し部分と並行して調査を進めた。その結果，基本層序の第Ⅲ層（灰褐色土）下部から第Ⅳ層（赤褐色土）にかけて細石刃・スクレイパー・石核などの石器や剥片・砕片などが一定量出土し，狭隘な調査範囲ながらも当該期の遺物を確認できたことは大きな成果であった。

第２節　基本層序

上日置城空堀跡の基本層序を第３図に示した。第４トレンチで観察された土層堆積状況が最も良好であり，周辺遺跡で確認されている層序と比較しても概ね整合性をもっている。

第Ⅰ層は表土である。調査区周辺の土地利用は農地がその大半を占める。そのため客土の搬入や天地返しなども行われている。第II層は鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）が混在する灰褐色土である。調査範囲や周辺の露頭ではプライマリーな同火山灰の堆積層は確認できなかったが，近くに鎮座する上日置神社裏の天地返しされた畑地では火山豆石を含むアカホヤブロックが認められ良好な堆積層の存在が指摘できる。第Ⅲ層は小林軽石（Kr-Kb）に由来する白色微細粒や橙色軽石粒が視認できる灰褐色土である。第II層と比較してやや暗い色調である。第Ⅳ層は堅くしまっており，層中に含まれる赤橙色微細粒が特徴である。テフラ分析の結果では，同層中の斜方輝石の屈折率から姶良岩戸テフラ（A-Iw）や姶良大塚テフラ（A-Ot）の混在が指摘されている。第Ⅴ層の褐色土から下層には礫の混在が顕著となり，土質も少しずつ粘性を帯びるとともに混在する礫も下層ほど長大化する傾向が認められる。

なお，テフラ分析の詳細については第Ⅲ章第４節の自然科学分析の結果を参照されたい。



Ⅰ　暗灰褐色土（Hue10YR3/2）
表土（耕作土）
Ⅱ　灰褐色土（Hue10YR5/4）
粘性なし。粗砂。
Ⅲ　灰褐色土（Hue10Y5/3.5）
Kr-Kbに由来する30㎜以下のブロックを含む。
Ⅳ　赤褐色土（Hue7.5YR5/3.5）
1㎜以下の白色および赤褐色の微細粒を含む。
Ⅴ　褐色土（Hue2.5YR6/5）
20～30㎜の小礫含む。
Ⅵ　黄褐色土（Hue2.5YR6/6）
20～30㎜の小礫を5層より多く含む。
Ⅶ　黄褐色粘質土（Hue10YR6/8）
灰色粘質土および亜円礫を含む。

第３図　第４トレンチ（T_4）土層堆積状況（S=1/30）

第Ⅲ章　調査の記録

第１節　中世の遺構と遺物

１　上日置城跡の縄張り

上日置城の城地となった台地縁辺部の舌状の地形。周辺にもほぼ同じ標高の台地が展開するこの地形が城地として選択されるには，開析により発達した浸食谷がもたらした偶然が大きく影響している。すなわち，北東方向に張り出すこの舌状の地形はその北西側と南東側に深く入り込んだ谷地形があってはじめて城地としての有用性を見出すことができるのである。このような地形は上日置城跡の正反対の台地縁辺にも２か所ほど認められるが，舌状の丘陵上部の平坦面が狭隘で一定の面積が確保できなかったり，丘陵裾部から丘陵上部の平坦面までの傾斜が緩やかなため防御という側面からは問題があったりしたことが城地としての選択に至らなかったと理由と思われる。

上日置城跡の縄張り図を第４図に示した。この図を見て分かるように，一定の空間を確保することが可能な２つの曲輪から構成されている。今回調査した空堀跡で台地から裁断された曲輪Ⅰ（約780㎡）と開析谷を挟んで東に位置するほぼ同じ標高の曲輪Ⅱ（約580㎡）がそれである。この２つの曲輪を比較すると面積的にはそれほど大きな差は存在せず，標高的にも曲輪Ⅰが曲輪Ⅱをわずかに上回る程度である。しかし，縄張りという構造的な特徴からこの２つの曲輪を比較するとその両者の相異は明らかとなる。すなわち，防御性を追求した主郭としての曲輪Ⅰと曲輪の周囲およびその内部に明瞭な構造的特徴を見出せない副郭的な存在としての曲輪Ⅱという構造的な相異であり，並列して存在する曲輪ではあ

第４図　上日置城跡縄張り図（S=1/1000）

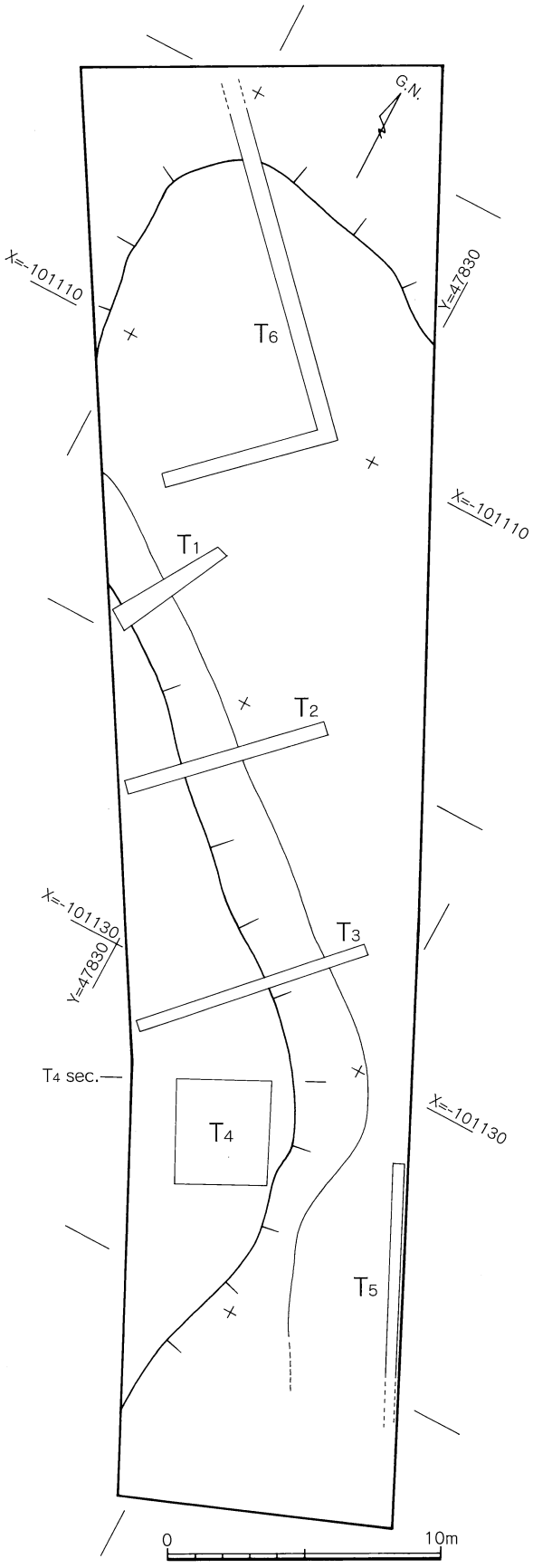
るが曲輪Ⅰへの求心性は明らかである。その相異は曲輪Ⅰの法面に見られる急角度の明瞭な切岸にも表れており，北西斜面から今回調査を行った空堀跡のある南西斜面かけての眺めは圧巻である。また，曲輪Ⅰの北東部と南西部には土塁と認定できる高まりが認められることや，虎口（第４図中のC）の南西側には一定の面積を確保した高まりが認められ櫓台としての可能性が指摘できること，さらには曲輪Ⅰの切岸裾部の北西側および南東側に谷からの侵入を拒むように設けられた曲輪の存在も注目すべき点である。

その他，後世の所作によると思われる改変で現状ではその形状がやや失われつつある曲輪Ⅱと曲輪Ⅰの間に設けられた二重の土塁や虎口から空堀の堀底に連絡する土橋など小規模ながらこの城跡には見るべき残存遺構が多い。新富町内の城郭には，上ノ城跡を代表として堀切・土塁・切岸の巧みな配置により複数の曲輪を連鎖状に配列させる構造がよく見られるが，尾根筋や舌状地形を利用して築かれたこの上日置城跡や竹ケ山(城)のような小規模の城跡にも，２つから多くても３つの小曲輪を並列させる同じような構造を見出すことができる。

２　空堀跡について

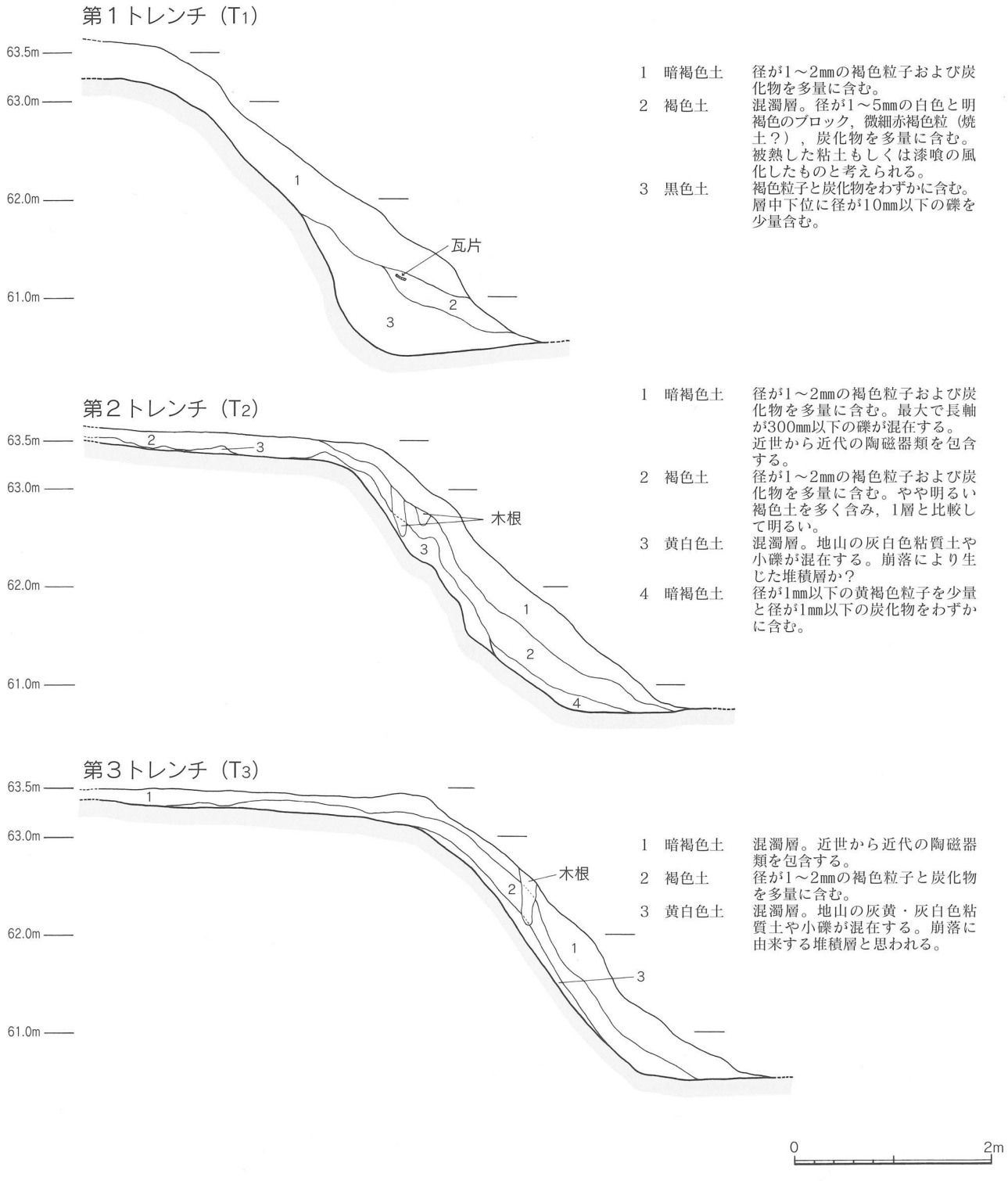
(1)　空堀跡の規模

上端総延長が30ｍ弱のこの空堀の規模は，同規模の城郭と比較して突出して大きなものではないが，平均して20ｍ近い幅を有することは特筆されるべきであろう。数値的な側面から見ると，空堀の上端と下端の最大比高差は約2.87ｍ，最小比高差は約2.52mで，比高差の平均値は約2.62mである。また，空堀跡の斜度は法面に凹凸が確認できるもののさほど大差がなく，平均48°の斜度を有し，対峙する主郭に相当する曲輪Ⅰの切岸が有する52°の平均斜度に迫るものである。また，覆土状況をみてみると，第６図に示した３つのトレンチで観察された堆積状況を見て分かるように旧状をよく反映した覆土となっている。空堀の上部平坦部付近は畑地として利用されてはいたが縁辺までは影響を受けておらず，果樹



第５図　空堀跡平面図（S=1/250）

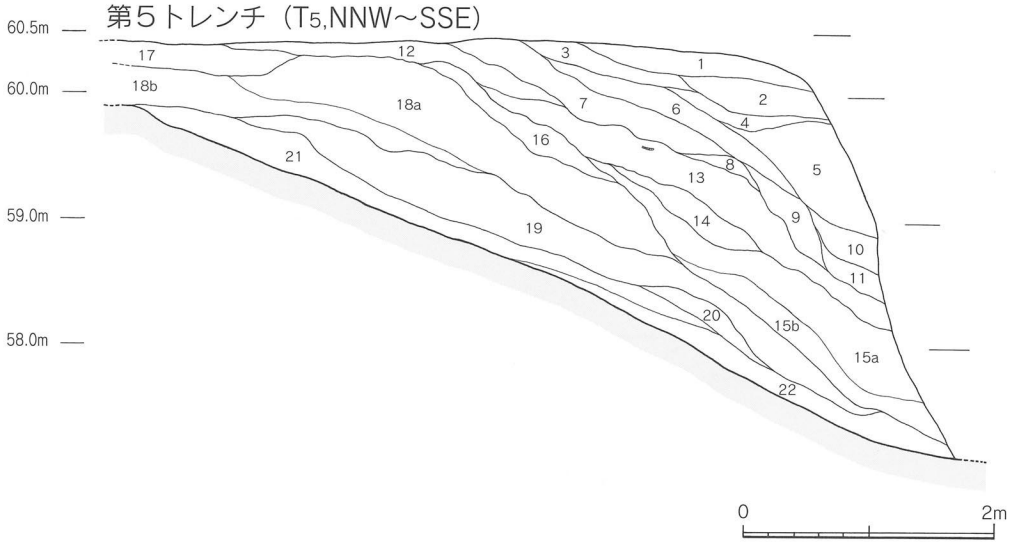
等の植栽程度であったことが空堀跡の旧状を確認できた大きな要因であろう。また，この覆土の表層には昨今の開墾等により混入したと考えられる縄文時代から古墳時代の遺物も包含しており，この周辺に展開した各時代の営みがあったことを裏付けるものとなった。なお，覆土に包含されていた遺物については，本章の第３節に一括したので参照されたい。



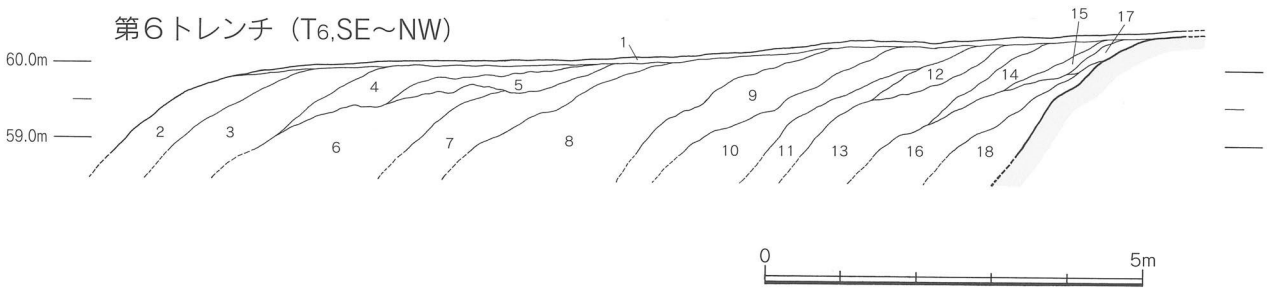
第６図　空堀跡覆土状況実測図（S=1/60）

(2) 造成による堀底の拡張

堀底の平面プランを確認する段階で，両端部で谷への開放方向に不自然な張り出し部が認められたため，その拡張が行われた可能性が指摘された。そこで，両端部にトレンチを設定し土層堆積状況を観察し拡張の有無を確認した。第７図が空堀跡の堀底両端部に設定した第５トレンチ(T_5)と第６トレンチ(T_6)の土層堆積状況である。この図が示すとおり両方のトレンチで浸食谷の方向に向かって押し出されるように堆積した状況が認められ堀底の拡張に伴う造成が行われたことが確認できた。第５トレンチでは緩やかに傾斜する地山に対して最初はそれを覆うように土が堆積しているが，標高58ｍを超えた辺りからは端部に角度をもたせるために少しずつ版築するように堀底のレベルまで造成を繰り返している。また，第６トレンチでは地山の傾斜角度に対してほぼ沿うような形で土が連続して谷方向へと押し出されており，堀底とレベルを揃え平坦面を確保していく造成の過程が確認できた。



1 にぶい黄褐色土 竹根の侵入が激しい。しまりがなくさらさらしている。粗砂。
2 明黄褐色土 径が120㎜以下の礫を含む。粘性が強い。
3 明黄褐色土 径が3㎜以下の小礫を含全体的に含む。炭化物が認められる。
4 明黄褐色土 ２層よりやや暗く粘性が強い。礫を含まず。
5 黄橙色土 版築された壁面に用いられた粘質土。
6 黄褐色土 径が3㎜以下の小礫を含全体的に含む。粗砂。粘性なし。
7 明黄褐色土 径が10㎜以下のKr-Kb風成ブロックを含む。粘性あり。
8 褐色土 しまりがなくガラス成分をわずかに含む。ガラス成分を含む。
9 黄褐色土 径が10㎜以下のKr-Kb風成ブロックを含む。粘性あり。
10 褐色土 径が5～20㎜の阿蘇４火山灰のを10%程度含む。しまっている。
11 にぶい褐色土 混濁層。径が2～15㎜の明黄褐色ブロックを含む。
12 褐色土 Kr-Kbに由来すると思われる赤褐色・白色・黒色の細粒を含む。
13 暗褐色土 Kr-Kbに由来すると思われる明黄褐色の細粒を2%程度含む。
14 にぶい黄褐色土 混濁層。ガラス成分なし。短期間に流入か？
15 褐色土 やや粘性があり，炭化物を含む。aに比べてｂはやや暗い。
16 明褐色土 炭化物を全体的に含む。明黄褐色微細粒を層中下位に多く含む。
17 にぶい黄褐色土 竹根の侵入が激しい。炭化物を多く含みしまりがない。
18 褐色土 aに比べてｂはやや暗い。やや軟質の粗砂である。
19 にぶい黄褐色土 径が1～5㎜の小礫を散漫に含む。炭化物をわずかに含む。
20 黄褐色土 微細炭化物を多く含む。ややしまりがあり，礫を多く含む。
21 にぶい褐色土 混濁が見られる粘質土。段丘礫に由来する大小の礫を含む。
22 にぶい黄褐色土 一次流入土。炭化物を多く含み，ガラス成分もわずかに含む。



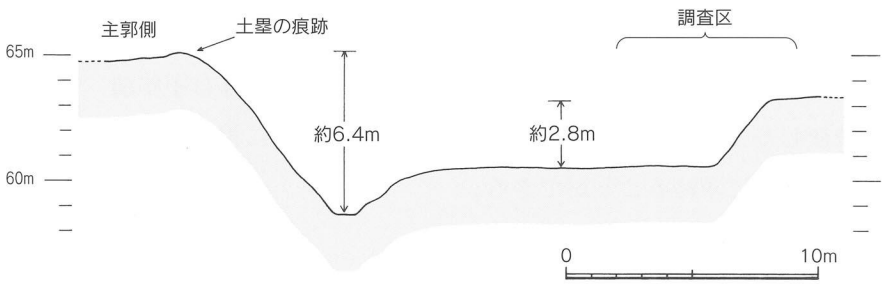
1 表土 竹根の侵入が激しい。礫を多く含む。
2 黄褐色土 径が10～120㎜の礫を多量に含む。礫により構成される。
3 にぶい黄褐色土 径が10～120㎜の礫を50%程度含む。粗砂。
4 にぶい黄橙色土 径が30～50㎜の礫を30%程度含む。粗砂。
5 明黄褐色土 褐灰色3%程度含む。礫を含まない。
6 褐色土 径が30～80㎜の礫を30%程度含む。ブロック状に堆積。
7 灰黄褐色土 径が50㎜前後の礫を30%程度含む。
8 褐色土 径が30㎜前後の礫を多量に含む。
9 にぶい褐色土 径が10㎜以下の砂礫より構成される。
10 褐色土 ８層に近い土質である。明褐色の小ブロックを10%程度含む。
11 褐色土 にぶい黄褐色の小ブロックを3%程度含む。しまりがない。
12 明黄褐色土 ５層と酷似する。径が10㎜前後の小礫をわずかに含む。
13 にぶい黄褐色土 粗砂。わずかにガラス成分を含む。やや粘性を帯びる。
14 褐色土 粗砂。ガラス成分を含まず。やや粘性を帯びる。
15 灰褐色土 粗砂。径が10㎜以下の小礫を含む。
16 褐色土 径が20㎜前後の小礫を30%程度含む。
17 にぶい黄褐色土 径が20㎜の小礫と粘土塊をわずかに含む。
18 にぶい黄褐色土 径が30㎜前後の小礫を多量に含む。

第７図　堀底端部の造成に伴う土層堆積状況（上：T_5 S=1/100，下：T_6 S=1/60）

(3) 横断面にみる空堀跡の空間利用

第８図は第２トレンチ付近から曲輪Ⅰの縁辺にかけての横断面である。図から分かるようにこの空堀跡には曲輪Ⅰの切岸裾部にもう一つの小規模な堀が設けられており，全体としては堀底が二段階となる構造をもつ。特に，曲輪Ⅰの切岸裾部の堀はその南東端部に位置する土橋に直交するように谷の方から引き込む形で設けられていることやその堀底が比較的平坦に仕上げられており，堀底道的な機能を有していた可能性も指摘できる。

また，二段階に堀を設けることは平坦で幅広の堀底のみの場合に比べて曲輪Ⅰへの侵入をより困難なものにすることから，この裾部の堀が防御性の向上を主たる目的として設けられたものであることは確かであろう。

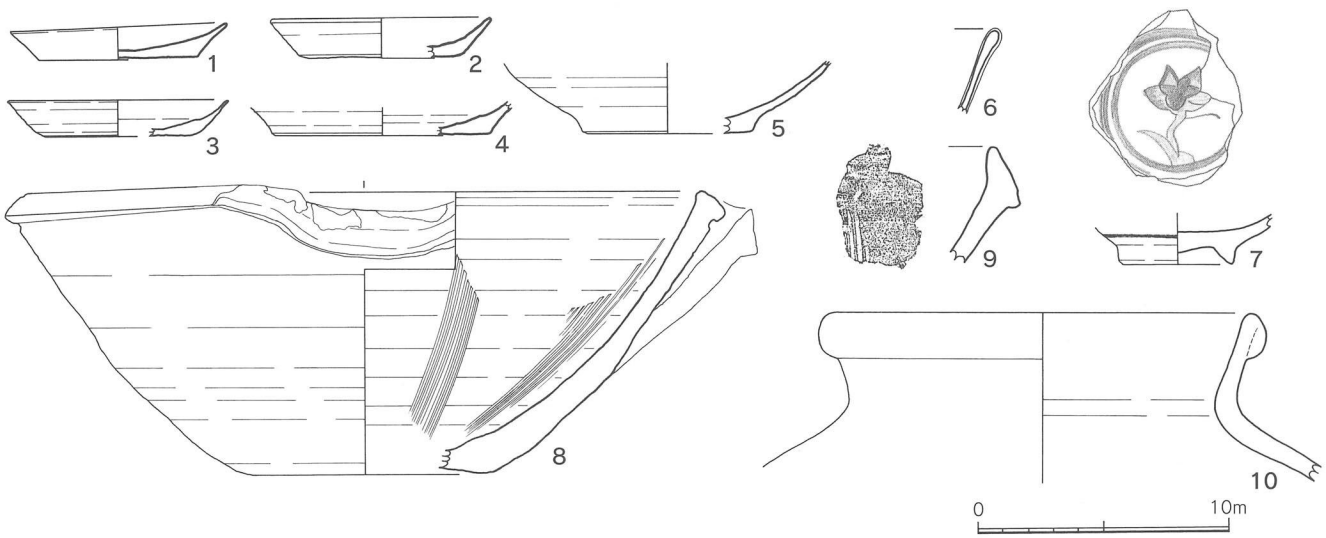


第８図　空堀跡横断面図（S=1/300）

(4) 中世の遺物（第９図　１～10）

空堀跡の上部平坦面およびその法面の覆土除去作業中に確認した遺物を第９図に示した。これらはすべて原位置をすでに遊離しており覆土に混在する状況での出土であった。しかしながら，上日置城跡の盛衰期を推察する上での数少ない資料としては有用であると考える。

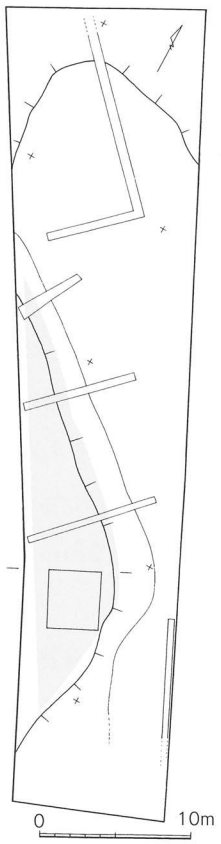
１～３は土師器の小皿である。１の体部は回転ナデにより成形時の調整痕が丁寧にナデ消されやや外反気味に立ち上がる。２・３はほぼ同じ作りであるが２に比べて３はやや粗製である。また，２の口縁部には黒色の斑点が認められる。４・５は土師器の坏である。１から５は風化によりやや確認しづらいところもあるがすべてヘラ切底を有する思われる。６は龍泉窯系の端反りの丸碗である。７は染付の皿である。見込みに二重の圏線を施しその中に花文が描かれる。16世紀代の漳州窯系の遺物と考えられる。８・９は備前の擂鉢，10は同じく備前の壺である。ともに15世紀前半に位置付けられる。



第９図　上日置城空堀跡出土土師器・陶磁器実測図（中世 S=1/3）

第２節　旧石器時代の遺構と遺物

今回，旧石器時代の遺構および遺物について調査した面積は右の第10図に示した空堀跡の上部平坦面からその法面の一部がかかる約22.8㎡という極めて狭小なものであったが，その狭い範囲で土坑１基を検出するとともに一定量の遺物の出土を見ることができた。出土した遺物は，ナイフ形石器１点，角錐状石器１点，掻器２点，細石刃３点，細石核１点，石核２点，使用痕ある剥片１点などである。ナイフ形石器を除いて，これらの出土遺物の帰属時期はその出土層位から，今から１万４千年から１万６千年前に降灰したとされる小林軽石（Kr-Kb）の降下以降に相当する細石器文化期に求めることができる。



第10図　旧石器時代の調査範囲

１　遺構

検出した遺構は調査範囲のほぼ中央，第Ⅳ層上面で検出した不成形な土坑１基である。第12図に示した遺物の出土状況にもブロック等の遺構は認められなかった。

土坑

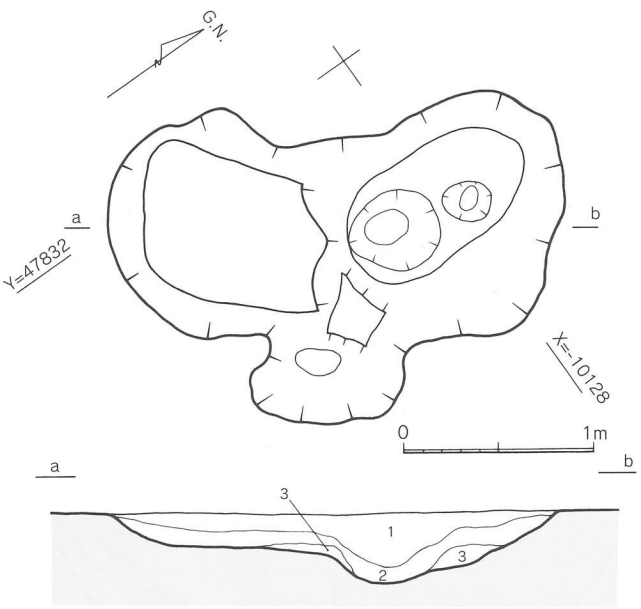
長軸約2.4ｍ，短軸約1.5ｍを測る。埋土中には小林軽石の風成層に由来する微細白色粒を含んだ径が10～15㎜のブロックを含んでいた。このことから，遺構の帰属時期は小林軽石降灰から細石器文化期と推定できる。後の遺構中には３か所の浅い窪みが認められたが，埋土中に遺物の混入などはなかった。

２　遺物の出土状況と遺物

(1)　出土状況

基本層序における第Ⅲ層下位から第Ⅳ層の上位が旧石器時代の遺物包含層であり，第12図がその分布状況を示したものである。出土範囲は調査区のほぼ中央に偏っているが，遺物が突出して集中するブロック的な様相を示す状況は見られなかった。しかし，調査範囲内では遺物の出土がやや南の開析谷側に偏る傾向が見て取れる。

また，遺物の垂直分布状況は，分布図が示すとおりその包含層位は63ｍ±0.2ｍの範囲に集中する。このレベルは第Ⅲ層と第Ⅳ層の層界付近に相当し，その狭い範囲に遺物包含のピークが存在することが分かる。



断面規準高は63.0m

1.褐色土(Hue10YR 4/4.5)
　径1～1.5㎝のKr-Kbのブロックをわずかに含む。やや粘性あり。
2.褐色土(Hue10YR 4/4.5)
　1より粘性が強い。ややしまりがあり，明黄褐色の粘質土を10%含む。
3.明黄褐色(Hue2.5Y 6/7)
　2層の埋土が混在し，径が径1～2㎝の石をわずかに含む。

第11図　土坑実測図（S=1/40）

(2) 遺物（第14図　11～23）

ナイフ形石器（11）

頁岩製の縦長剥片を素材とする。自然面を残す左側縁の基部付近にのみわずかに刃潰し加工を施している。ここではこの調整剥離を積極的に評価しナイフ形石器と認定したが，本来この遺物が包含されていた層位からは遊離した資料である。

角錐状石器（12）

両側面および裏面の一部に加工が施されており，特に右側縁に顕著な加工が認められる。頁岩の縦長剥片を素材とするが，基部が欠損している。

掻器（13・14）

13は頁岩製の円礫から取り出された厚みのある剥片を素材とする。素材を回転させながら打面を転移させ，側縁部に刃部を作出しているが側縁加工は周回しない。14も頁岩の縦長剥片を素材とする。両側縁には顕著な加工は認められない。

石核（15・16）

15はホルンフェルスの亜円礫と思われる素材の石核である。打面転移を行いながらの剥出作業が確認できる。16は自然面を多く残すことから，比較的薄い小型の黒曜石を素材としたものと推定できる。側縁部に微細な剥離が認められる。

細石刃（17・18・19）

３点の細石刃を確認したが，接合が可能な細石核は調査範囲内では確認できなかった。

細石核（20）

長軸が2cmをわずかに上回る程度の小型の黒曜石を使用している。自然面が残る素材となった剥片を分割し，打面調整を施したあとに不整剥片の剥出作業を行っている。

使用痕ある剥片（21・22）

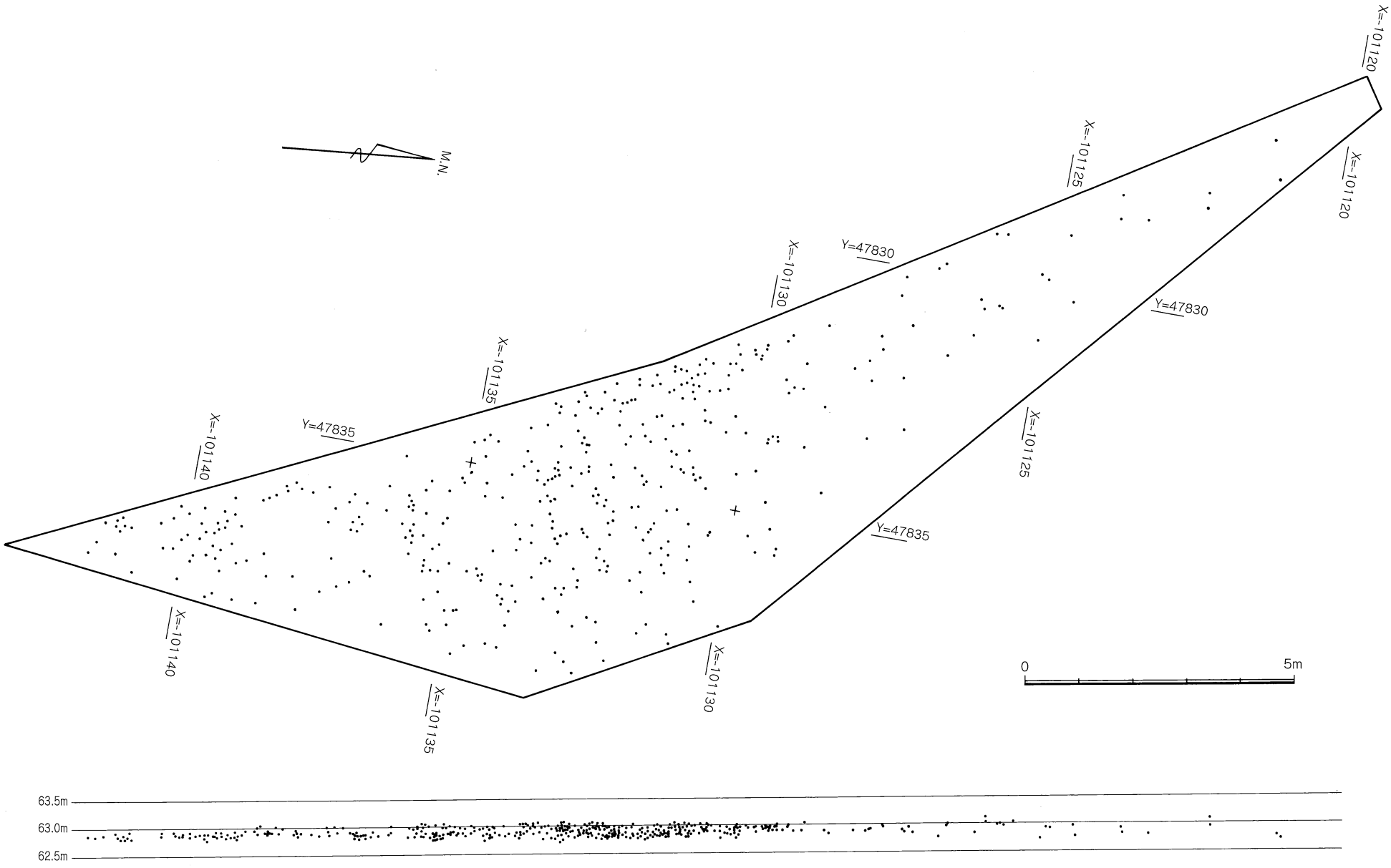
21と22は頁岩製の「ノ」字状剥片である。側縁部に連続した微細な剥離が認められる。22には左側縁上位に使用痕と思われる剥離が認められる。

剥片（23）

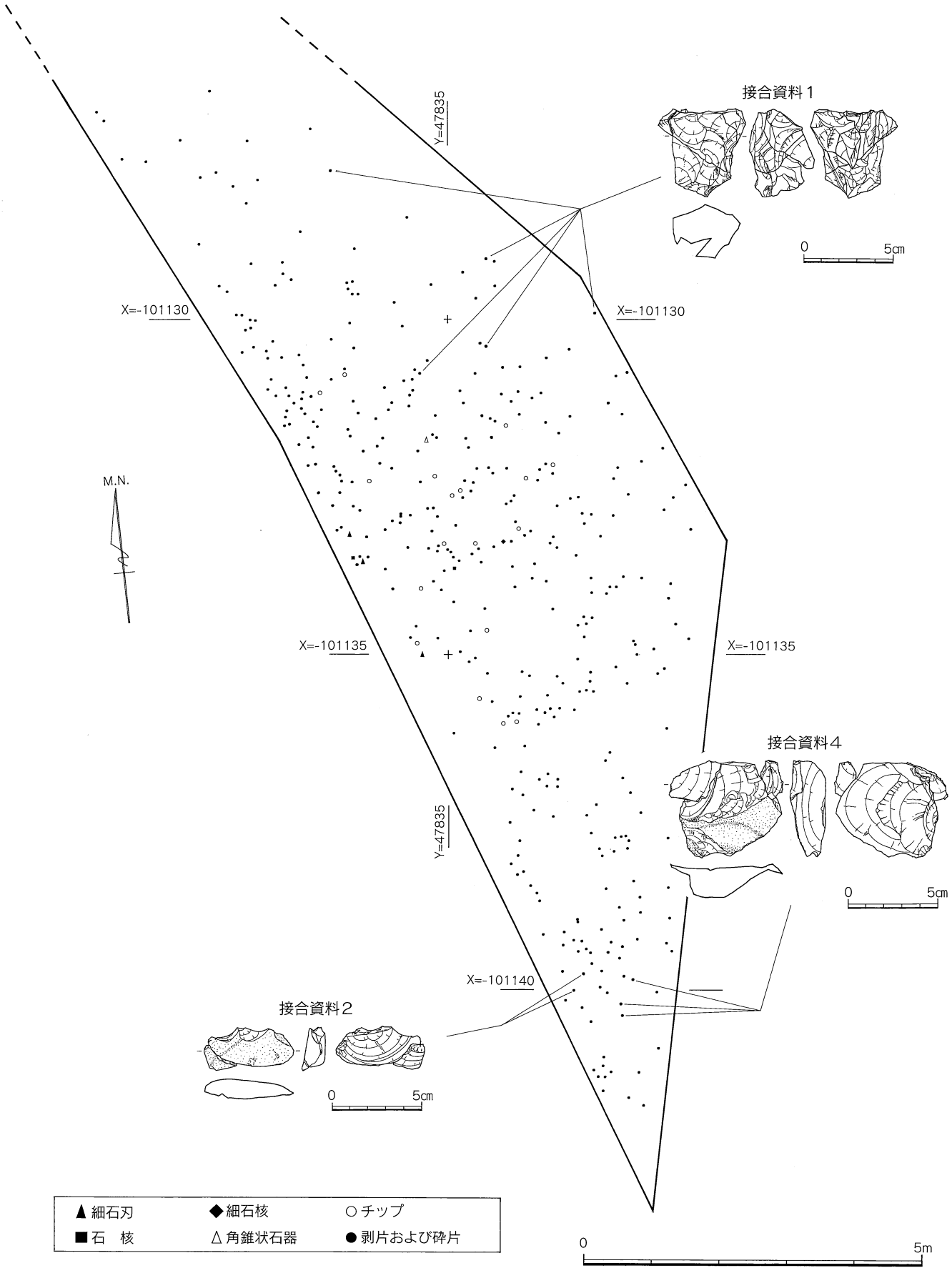
両端部が欠損した頁岩製の縦長剥片である。両側縁部に加工および使用の痕跡は認められない。

接合資料（第15図）

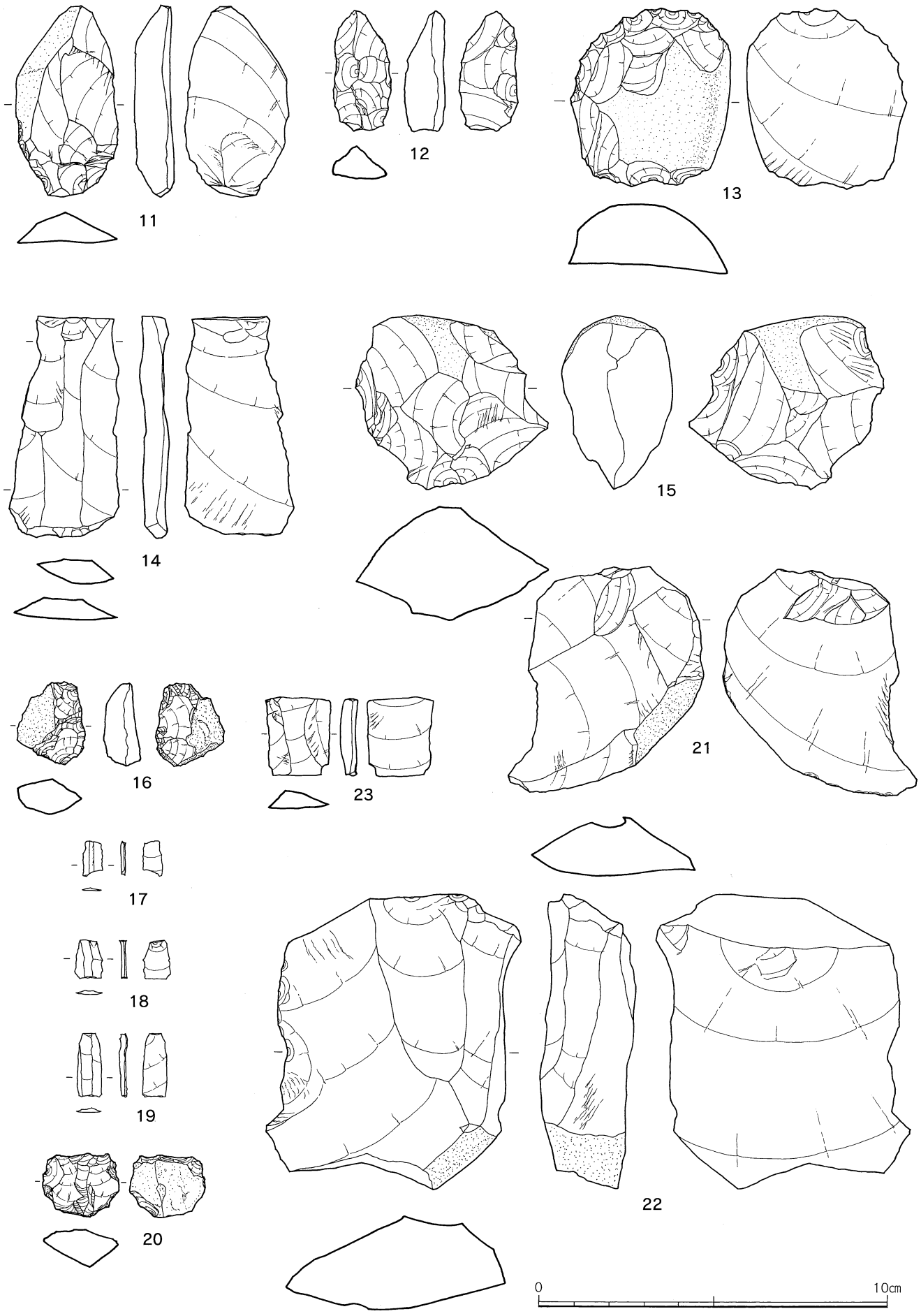
資料１は剥片５点（24～28）の接合例である。剥離の工程は28をまず剥出し，次に25の26順に作業が行われる。しかし実際には，その前に少なくとも２つ以上の剥離面が確認され，それ以前に剥出された剥片の存在が指摘できる。25と27については24と27の接合面に節理が認められることから作業による衝撃で意図せず分割されたことも考えられる。その後作業は26を剥出し，最終的には24が残る。したがって，剥出順序としては，28→25→27→26→24が想定できる。資料２は剥片２点（29・30）の接合例である。29に残る最大剥離面が母岩との接面となる。資料３は剥片２点（31・32）の接合例であり，その剥出順序は31→32であるが，その間にもう１点先行して剥出された剥片の存在が指摘できる。資料４は剥片３点（33・34・35）の接合資料である。34と35の剥出により33が残り，その側縁部には微細な剥離が認められる。資料２から資料４の石材はすべて頁岩であり，その分布も第13図に示すように狭い範囲に偏っていることから母岩を共有するものと思われる。



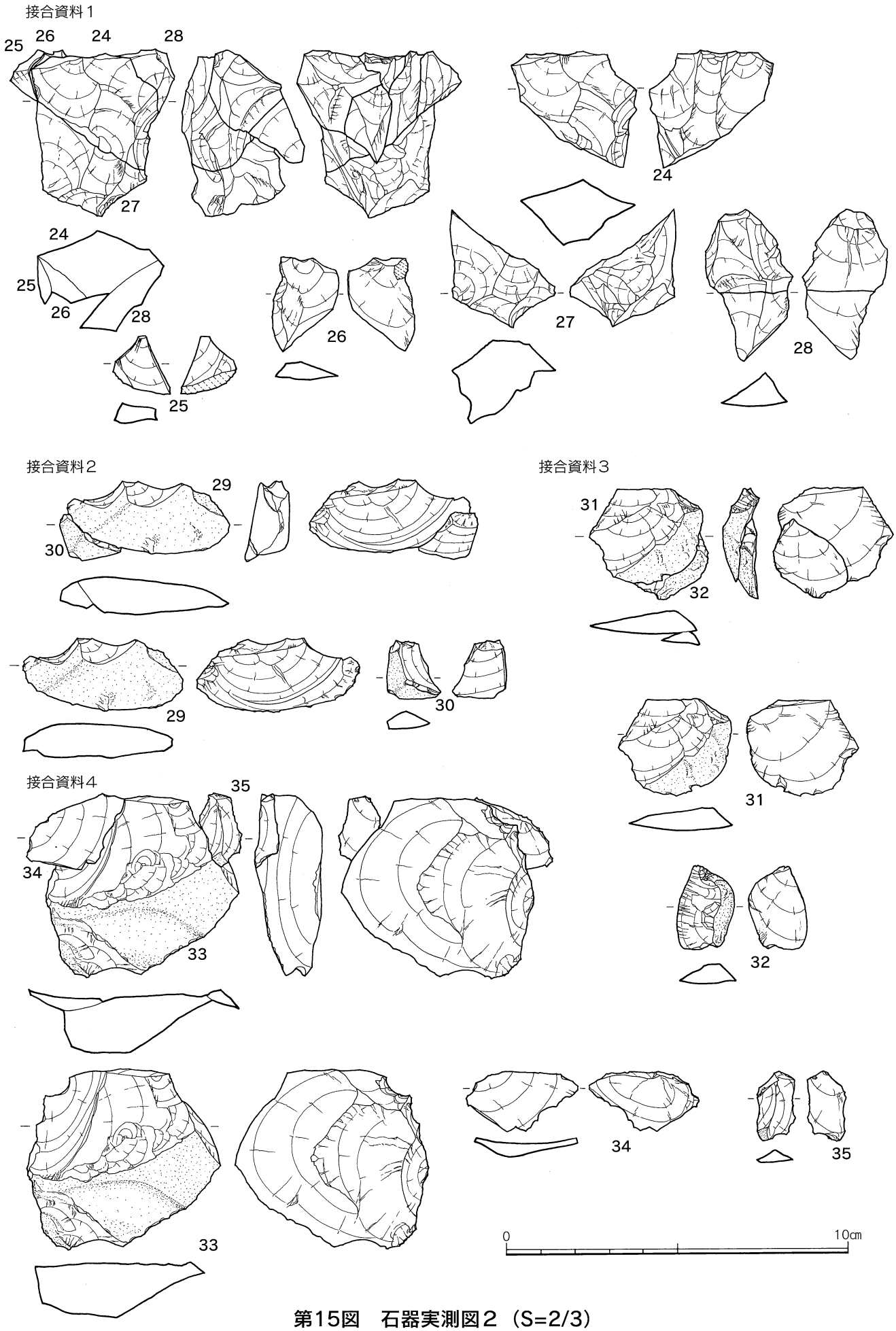
第12図　遺物分布状況（平面・垂直　S=1/100）



第13図　遺物平面分布図（S=1/80）



第14図　石器実測図１（S=2/3）



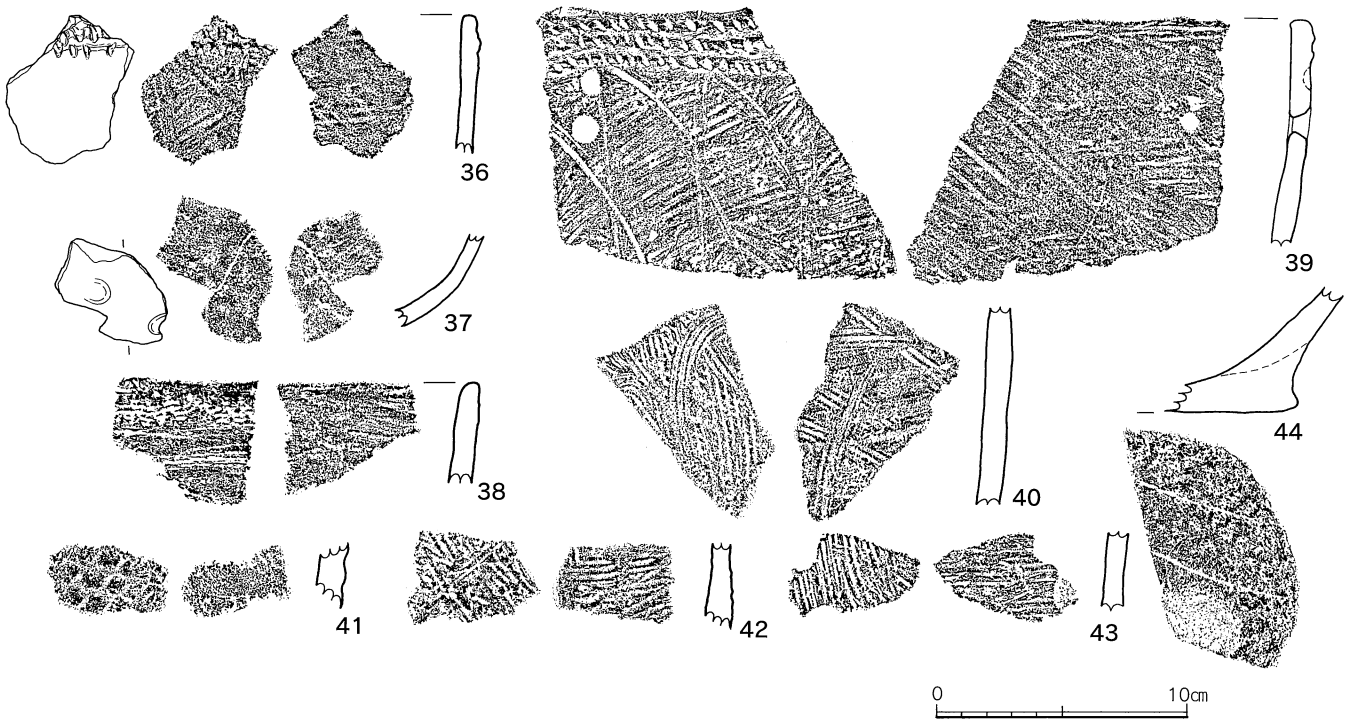
第15図　石器実測図2（S=2/3）

第３節　その他の時代の遺物

空堀跡の覆土中から出土したその他の遺物を第16図から第20図に示した。遺物の帰属時代は縄文時代，弥生時代，古墳時代，近世・近代である。本節ではそれらの遺物を時代を取り上げ説明を加える。

１　縄文時代の遺物（第16図 36～44）

36は口縁部外面のごく狭い範囲に３条のキザミによる施文が集中する。37は指頭圧痕が認められる薄手の胴部片である。ともに草創期に位置付けられる。38は前平系の円筒形条痕文土器である。39・40は轟式の範疇に収まるものである。規則的な動きが見える条痕文が施される。41は楕円押型の施文をもつ押型文土器である。42・43はともに胴部片であり，条痕が内外面に顕著に認められる。44は底部片である。底部外面に葉脈状の圧痕が認められる。

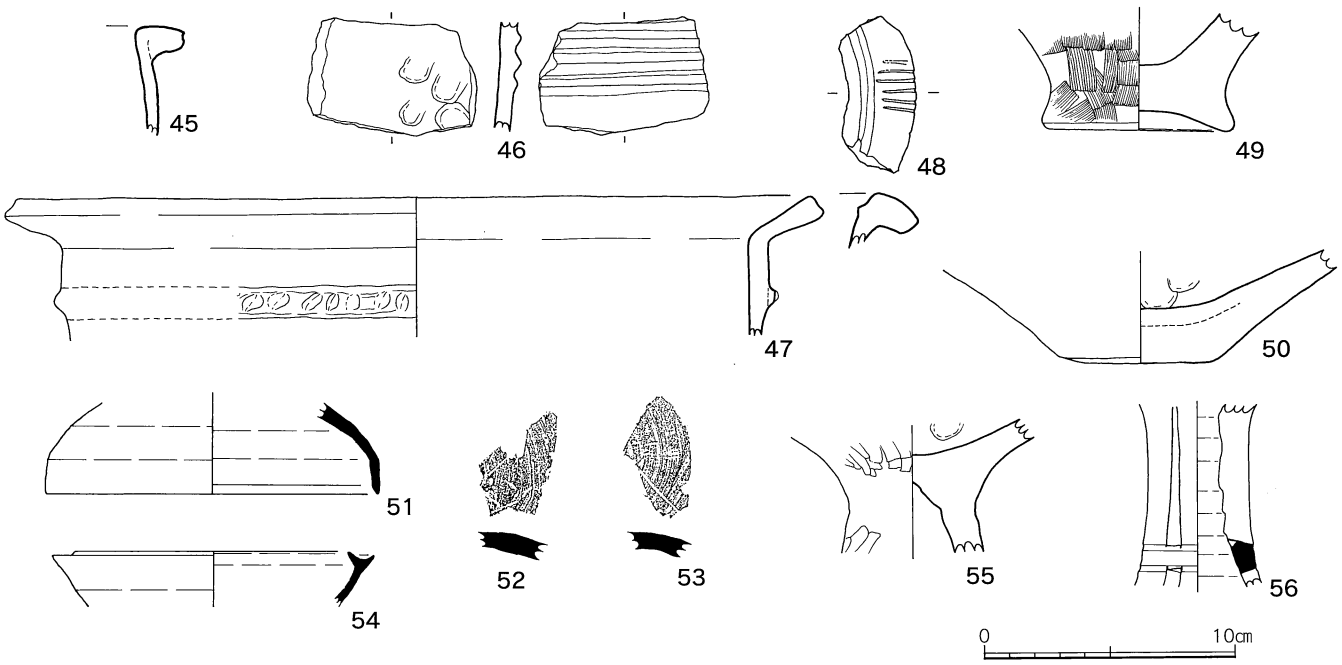


第16図　縄文土器実測図（S=1/3）

２　弥生時代および古墳時代の遺物（第17図 45～56）

45から50は弥生土器である。45・46は甕である。45は口縁部がＬ字状に屈曲し，口唇部にはヨコナデによる凹線が認められる。46は胴部片であり，３条の突帯が巡る。47は口縁部が「く」の字に外方に屈曲し，１条の貼付刻目突帯をもつ甕である。いわゆる中溝式土器であり後期前葉に位置付けられる。48は壺の口縁部である。49・50は底部片である。49は47と同じ中溝式の甕の底部であると思われる。50は壺の底部である。風化が著しく調整が不明瞭である。

51～56は古墳時代の土師器(55)および須恵器(51～54・56)である。51～53は坏蓋である。52と53には明瞭な回転ケズリが認められる。また，窯印と思われるへら記号の一部が認められる。54は坏身である。薄手で7世紀代に位置付けられる。55は高坏の脚である。56は二段の透かしを三方にもつ高坏の脚である。上下の透かしの間に２条の沈線が巡る。



第17図　弥生土器および古墳時代の遺物実測図（S=1/3）

3　近世から近代の遺物

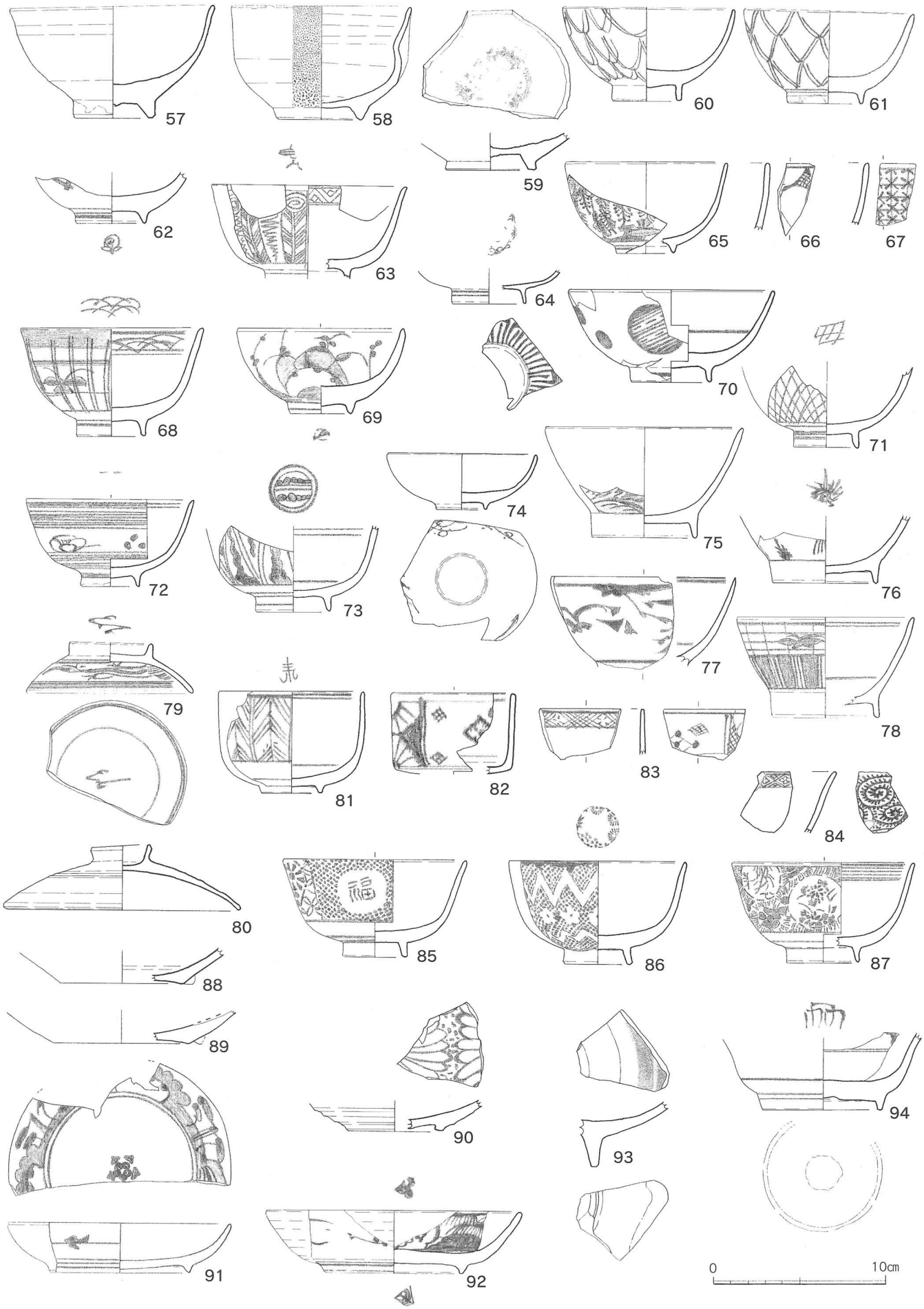
空堀跡の覆土中には日常雑器としての碗・皿・擂鉢などの肥前系の近世陶磁器類が多量に混在していた。その他にも，瓦・銭貨・金属製品なども確認され出土遺物の構成は多種多様である。それらは出土の状況から廃棄に伴い覆土中に混入したものと考えられる。ここでは一定量の出土を見た近世陶磁器類を編年的な位置付けの中で捉えるとともに，その他の遺物についても若干の説明を加える。

陶磁器類（第18～20図 57～103）

碗・小坏（第18図 57～87）

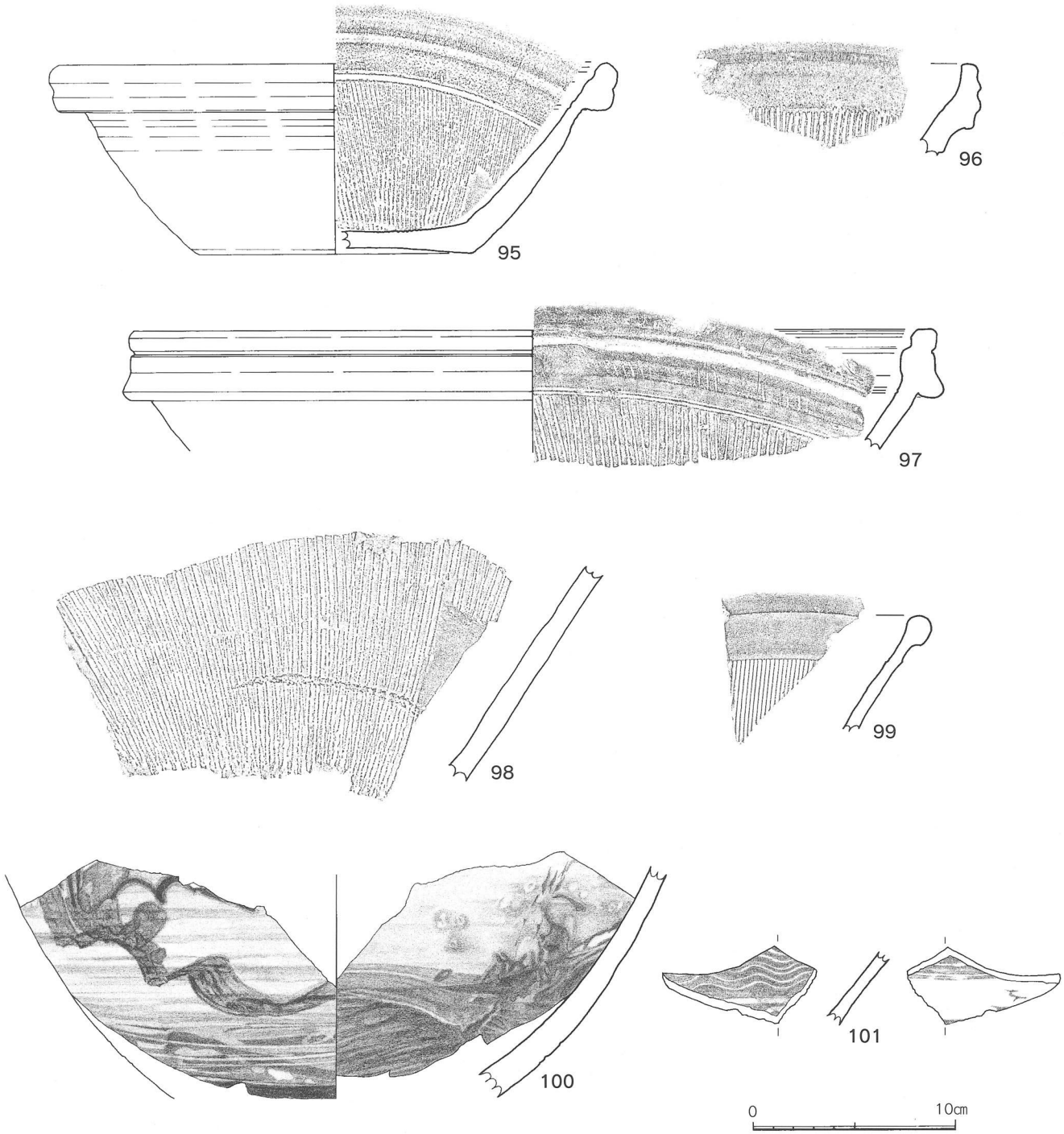
57～59は薩摩焼の碗である。57は黄褐釉と褐色釉の掛け分けが施される。また，内面の見込みは蛇の目釉剥ぎとなる。58の体部外面は高台畳付を除いて全面施釉で，鮫肌状の器表となる。59は底部片である。内面に焼成時の白砂が付着している。残存破片の体部内外面は無釉である。

60～74は肥前系の丸碗である。60・61は二重網目文である。60の線が繊細で柔らかい感じを受けるのに対し，61の線は力強く鋭角的に表現される。61の体部下位から高台にかけて三重の界線が巡る。62は体部外面にコンニャク印判による蔦文が施される。63は素描によるよろけ縞と矢羽根文を交互に組み合わせた文様が外面を周回する。口縁部内面には四方襷文が描かれる。64は見込みに松竹梅文を環状に描く。18世紀中葉から後葉。65は外面に枝垂桜文が描かれる。器壁は薄い。66には菊花文が描かれ，その隙を埋めるように格子目文が描かれるいわゆる菊花詰文である。口縁部外面に界線が一条巡る。67は格子目文の交点に「×」を描いた文様構成である。弥勒窯の資料に近似した文様がある。68は蝶の入った虫籠文を描いた端反りの丸碗である。69は雪輪草花文である。縦方向に長い雪輪が特徴である。70は丸文が描かれた碗である。見込みは蛇の目釉剥ぎとなる。71は斜格子文が外面全体に描かれる。19世紀末に位置付けられる。72は界線を多用し帯状にした文様の間に梅花文を描く。73は二重線による鋸歯状の



第18図　近世・近代陶磁器実測図（碗・皿・鉢　S=1/3）

区画の間によろけ縞のような太めの線を描いた文様が外面全体および見込みに見られる。74は器高が低い碗である。広い見込み部分に対して高台の径が小さく広口の器形を呈する。外面には松竹梅と思われる文様が描かれる。75から78は広東碗である。75には山水文と思われる文様が描かれる。呉須の発色が悪い。76の外面には若松文が間隔を置いて規則的に配されている。見込みには虫文が描かれる。77には草花文が描かれ，口縁部の内外面に１条の界線，内面には１条の圏線が見られる。79・80は蓋である。79は端反碗の蓋である。３重の界線と四重の界線の間に花鳥文が描かれる。72の碗と文様構成に共通点があり，同時期のものと思われる。80は関西系の京焼風陶器である。大きさからすると鉢蓋になると思われる。81から87は碗，筒形碗および小坏である。81は体部外面に矢羽根文を周回させる。口縁部内面



第19図　近世陶器実測図（擂鉢・鉢　S=1/3）

に２条の界線，見込みには寿文が描かれその周りを１条の圏線が巡る。82は半菊花文を上下対象に描く筒形碗である。83も82と同様の筒形碗である。84は外面に蛸唐草，口縁部内面に四方襷文を描く。口縁部は端反となる。85から87は型紙摺りによる端反碗である。

皿（第18図 88～92）

88・89は陶器皿で，やや底上げの底部をもつ。ともに底部のすぐ脇に小豆大の瘤が認められるが，接地することはない。88は内面に施釉，89には荒い砂が付着する。90は菊花文を描き，その間を点描で埋める。17世紀前半に位置付けられる。91は雪輪草花文を内面に帯状に巡らし，見込みには五弁花を描く。92は岩竹文を帯状に描く。見込みには五弁花，高台内には渦福の銘款がある。

鉢（第18図 93・94，第19図 100・101）

93は白化粧土による刷毛目装飾が認められる。見込みには蛇の目釉剥ぎとなる。94は磁器の鉢である。見込みに源氏香文，高台は蛇の目凹形高台である。100は内外面に大胆な刷毛目を施す大型の鉢である。外面には鉄絵が描かれる。101は小型の鉢である。白化粧土による刷毛目装飾が施される。

擂鉢（第19図 95～99）

95から97は明石・堺系の擂鉢である。体部外面の回転ケズリによる調整を特徴とする。95は櫛描きの密な条線が底部まで施される。96・97は96に比べてやや大きめの個体で，条線の間隔もやや広めである。98は大型で体部の立ち上がりがやや急な器形をもつ。器表面や胎土の特徴の類例が乏しいことから，在地系の可能性が指摘できる。99は肥前系の擂鉢である。櫛描きの条線は上端を丁寧に撫でて揃えてある。

壺（第20図 102）

102は器高が60cmを超える大型の三耳壺であり，肩付近に２条の界線が巡る。無釉で，胎土に小型の巻き貝の混入が認められる。琉球産であると思われる。

甕（第20図 103）

内面に同心円の当て具痕，外面にはタタキによる調整痕が顕著に確認できる。また，肩付近に４条の櫛描きの波状文が施されており周回するものと思われる。16世紀末から17世紀初頭に位置付けられる。

瓦（第20図 104～106）

104・105は軒丸瓦の瓦当である。104は最大径約15.4cm，外縁幅平均2.3cm，瓦当高約2.1cmを計る。巴文様の尾は細長く伸びる。105は最大径約11.9cm，外縁幅平均1.9cm，瓦当高約1.7cmを計る。巴文様の尾は短くずんぐりとして形が不揃いである。同様に連珠文の珠も形が大小様々であり，104と比べて粗製で時代的に下るものである。106は最大幅約11.2cmを計る。胴部凹面には比較的細かい布目痕，３条の溝が認められる。瓦片はこの他に軒平瓦の瓦当や平瓦が出土している。

銭貨（第20図 107～109）

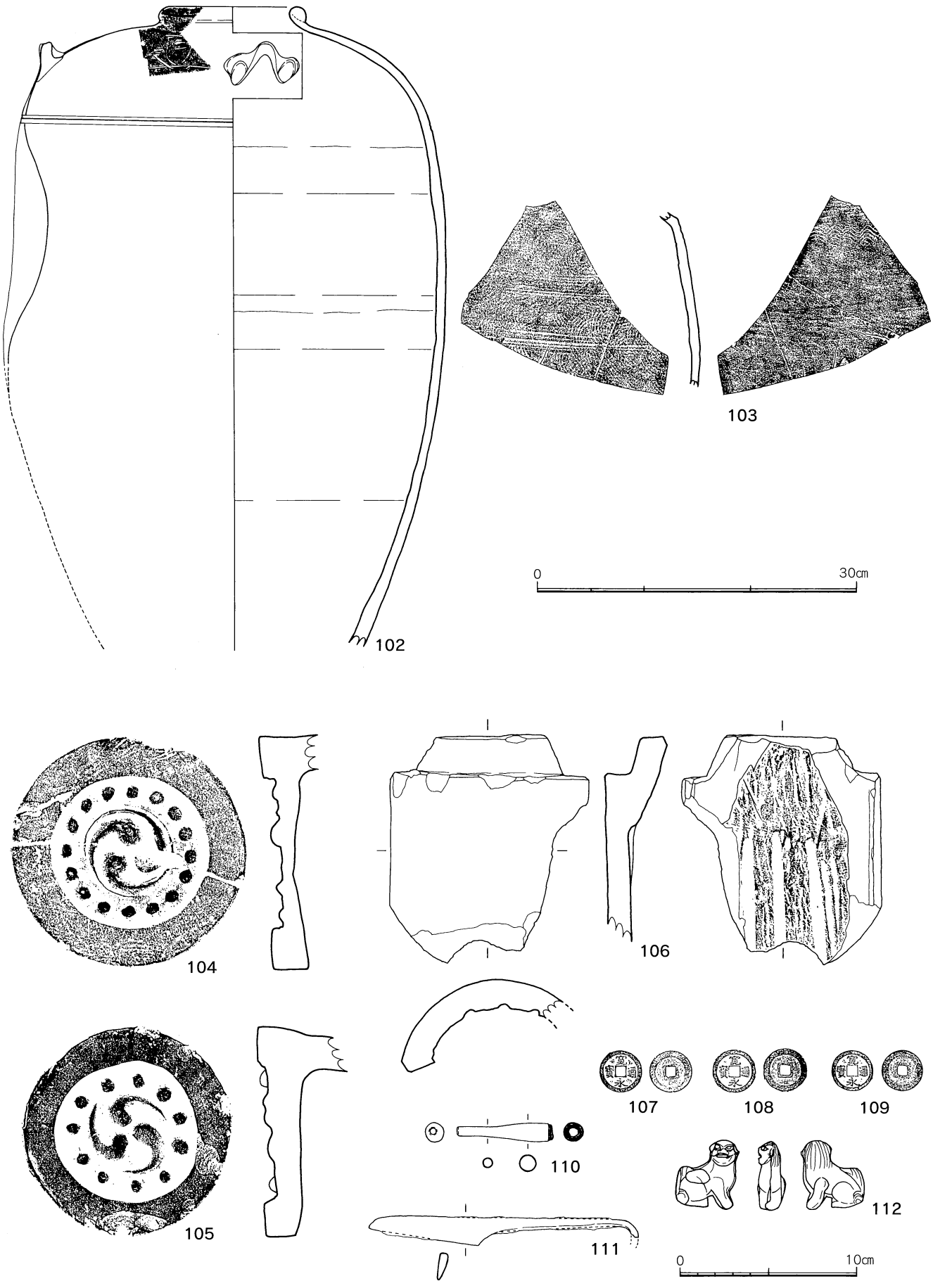
すべてが寛永通寶である。出土位置は同じであるが，109はやや腐食が進んでいる。それぞれの外縁外径および量目は107（2.37cm，3.5g），108（2.35cm，2.7g），109（2.34cm，2.3g）である。

金属製品（第20図 110・111）

110は真鍮製の煙管の吸口で，羅宇の木質が吸口内に遺存している。最大長約5.5cm，最大幅約1.1cmを測る。111は鉄製の鋏である。最大長で約15.2cmを測るが，腐食が激しい。

土人形（第20図 112）

狛犬の「阿」と思われる粗製の土人形である。頭部と胴部に緑釉を施している。



第20図　近世陶器（壺・甕　S=1/5）およびその他の遺物実測図（S=1/3）

第１表　遺物観察表１

遺物番号	種　別	器種・部位	層位・位置	法量（cm）			手法・調整・文様ほか		色　調		胎土の特徴	備　考
				口　径	底　径	器　高	外　面	内　面	外　面	内　面		
1	土師器	小　皿 口縁部～底部	空掘跡覆土	8.7	6.4	1.2～1.4	回転ナデ ヨコナデ ヘラ切り底	ナデ	浅黄燈	浅黄燈	１mm以下の灰白・明赤褐・灰色粒	
2	土師器	小　皿 口縁部～底部	空掘跡覆土	8.8	6.6	1.6	回転ナデ ヨコナデ ヘラ切り底	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	0.5mm以下の明赤褐・黒色光沢粒 微細無色透明光沢粒	
3	土師器	小　皿 口縁部～底部	空掘跡覆土	8.8	8.1	1.4	回転ナデ ヨコナデ ヘラ切り底	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	0.5mm以下の赤褐・灰色光沢粒 微細無色透明光沢粒	
4	土師器	坏 体部～底部	第１トレンチ (II層)	—	8.7	—	回転ナデ ヨコナデ ヘラ切り底	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	２mm以下の明赤褐色粒	
5	土師器	坏 体部～底部	空掘跡覆土	—	—	—	回転ナデ ヨコナデ ヘラ切り底	ナデ	橙	橙	0.5mm以下の赤褐・灰・灰色光沢粒	
6	青　磁	碗 口縁部	空掘跡覆土	—	—	—	施釉	施釉	オリーブ黄	オリーブ黄	精良	龍泉窯系
7	染　付	皿 底部	空掘跡覆土	—	4.3	—	界線	２重圏線 花文(牡丹か?)	明青	明青	１～３mm大の灰褐色，褐灰色粒 １mm以下の灰白色粒	漳州窯系
8	陶　器	擂　鉢 口縁部～底部	空掘跡覆土	28.5	9.1	11.6	回転ナデ	櫛描条線(１単位12本)	明赤褐	褐	５mm以下の黄橙・黒色粒 ２mm以下の赤褐・無色透明光沢粒	備前焼
9	陶　器	擂　鉢 口縁部	空掘跡覆土	—	—	—	回転ナデ	櫛描条線(単位不明)	黄灰	暗黄灰	６mm以下の黄灰・灰色粒	備前焼
10	陶　器	壺 口縁部	空掘跡覆土	—	—	—	自然釉	無釉	浅黄	褐	精良	備前焼
36	縄文土器	深　鉢 口縁部	空掘跡覆土	—	—	—	連続刺突文 条痕	条痕	にぶい黄褐	にぶい黄褐	微細半透明光沢粒 １mm以下の黄灰・褐色・灰白粒	
37	縄文土器	深　鉢 胴　部	空掘跡覆土	—	—	—	指押さえ ナデ	ナデ	明黄褐	にぶい黄橙	１mm以下の黒色光沢粒	
38	縄文土器	深　鉢 口縁部	空掘跡覆土	—	—	—	連続刺突文 条痕	条痕	にぶい黄褐	にぶい黄橙	２mm以下の光沢粒 ４mm以下の黄灰・灰白粒	
39	縄文土器	深　鉢 口縁部～胴部	空掘跡覆土	—	—	—	連続刻目 条痕	横・斜方向の条痕	橙	にぶい黄橙	２mm以下の黒白・半透明光沢粒 ２mm以下の黄灰・黒色粒	
40	縄文土器	深　鉢 胴　部	空掘跡覆土	—	—	—	条痕	条痕	橙	橙	微細な黒色・透明・半透明粒 ３mm以下の褐色・灰色・黄灰粒	
41	縄文土器	深　鉢 胴　部	空掘跡覆土	—	—	—	楕円押型文	風化が著しい	明褐	にぶい褐	１mm以下の黒色・半透明粒 ４mm以下の褐色・灰色・黄灰粒	
42	縄文土器	深　鉢 胴　部	空掘跡覆土	—	—	—	条痕	条痕	にぶい橙	にぶい黄橙	２mm以下の角閃石・石英粒 ２mm以下の黄灰・灰・褐色粒	
43	縄文土器	深　鉢 胴　部	空掘跡覆土	—	—	—	条痕	条痕 炭化物付着	橙	橙	微細な黒色・透明・半透明粒 ３mm以下の褐色・灰色・黄灰粒	
44	縄文土器	深　鉢 底　部	空掘跡覆土	—	—	—	ナデ	ナデ 黒変	にぶい黄橙	黒	２mm以下の灰白・にぶい黄橙 微細半透明光沢粒	
45	弥生土器	壺 口縁部	空掘跡覆土	—	—	—	ヨコナデ ナデ	ナデ	明褐	にぶい黄橙	４mm程度の橙色粒 ２mm程度の白色半透明粒 長石および微細無色透明光沢粒	
46	弥生土器	壺 胴　部	空掘跡覆土	—	—	—	３条の突帯 煤付着	ナデ	にぶい褐 褐灰	にぶい黄褐	３mm以下の乳白・黄褐粒 ２mm以下の金色光沢粒	
47	弥生土器	壺 口縁部～胴部	空掘跡覆土	32.4	—	—	ナデ 貼付刻目突帯	ナデ	浅黄褐	浅黄褐	２mm以下の灰・黄灰・茶色粒	
48	弥生土器	壺 口縁部	空掘跡覆土	—	—	—	６条？の沈線 ナデ	ナデ	橙	橙	２mm以下の灰褐色粒 １mm以下の黒色・半明光沢粒	
49	弥生土器	壺 底　部	空掘跡覆土	—	7.6	—	ハケ目	ナデ	明黄褐	明黄褐	２mm以下の灰・灰白・褐色粒	
50	弥生土器	壺 底　部	空掘跡覆土	—	5.8	—	丁寧なナデ	ナデ　指頭圧痕 黒変	灰黄	灰黄	１mm以下の黄灰・灰・褐色粒	
51	須恵器	坏　蓋 口縁部～体部	空掘跡覆土	—	—	—	回転ヘラケズリ	ヨコナデ	灰	灰	２mm以下の淡黄色粒 １mm以下の白色粒	
52	須恵器	坏　蓋 体　部	空掘跡覆土	—	—	—	回転ヘラケズリ ヘラ切り(窯印?)	ナデ	灰	灰	２mm以下の灰白・浅黄橙・黄褐色粒	
53	須恵器	坏　蓋 体　部	空掘跡覆土	—	—	—	回転ヘラケズリ ヘラ切り(窯印?)	ナデ	灰	灰	２mm以下の乳白色透明粒 ２mm以下の灰白・白色粒	
54	須恵器	坏　身 口縁部～体部	空掘跡覆土	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ ナデ	灰	灰	２mm程度の黒色粒 ２mm以下の灰・浅黄橙色粒	
55	土師器	高　坏 胴部～脚部	空掘跡覆土	—	—	—	ミガキ 工具ナデ	丁寧なナデ	にぶい橙 黄橙	頭	１～３mmの灰色粒 １mm以下の明赤褐・透明光沢粒	
56	須恵器	高　坏 脚　部	空掘跡覆土	—	—	—	２段透し ２条沈線	回転ナデ	黄灰	黄灰	２mm程度の黒色粒	
57	陶　器	碗 口縁部～底部	空掘跡覆土	11.9	4.9	6.6	施釉 掛け分け 高台内無釉	施釉 掛け分け 蛇の目釉剥ぎ	にぶい黄橙 暗赤褐	にぶい黄橙 暗赤褐	精良	薩摩焼
58	陶　器	碗 口縁部～底部	空掘跡覆土	10.4	5.0	6.6	施釉(鮫肌)	施釉	灰オリーブ	赤黒	精良	薩摩焼
59	陶　器	碗 体部～底部	空掘跡覆土	—	5.1	—	無釉	無釉 砂付着	黒褐	黒褐	精良	薩摩焼
60	磁　器	碗 口縁部～底部	空掘跡覆土	9.9	4.4	5.5	施釉 二重網目文	施釉	灰白	灰白	精良	肥前系
61	磁　器	碗 口縁部～底部	空掘跡覆土	10.0	4.1	5.5	施釉 二重網目文	施釉	灰白	灰白	精良	肥前系
62	磁　器	碗 体部～底部	空掘跡覆土	—	4.0	—	施釉 篦文	施釉	暗オリーブ灰	暗オリーブ灰	精良	肥前系
63	磁　器	碗 口縁部～底部	空掘跡覆土	11.3	—	—	施釉 よろけ縞 矢羽根文	圏線 四方捧文	明青灰	明青灰	精良	肥前系
64	磁　器	碗 体部～底部	空掘跡覆土	—	4.2	—	界線 角連弁	松竹梅文	灰白	灰白	精良	肥前系

第２表　遺物観察表２

遺物番号	種別	器種・部位	層位・位置	法量（cm）			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
65	磁器	碗 口縁部～体部	空掘跡覆土	—	—	—	施釉 枝垂桜文	施釉	灰白	灰白	精良	肥前系
66	磁器	碗 口縁部～体部	空掘跡覆土	—	—	—	施釉 菊文 格子文	施釉	明青灰	明青灰	精良	肥前系
67	磁器	碗 口縁部～体部	空掘跡覆土	—	—	—	施釉 格子文の交点に「×」	施釉	明緑灰	明緑灰	精良	肥前系
68	磁器	碗 口縁部～底部	空掘跡覆土	10.5	4.0	6.3	施釉 虫籠文	圏線 帯文	明青灰	明青灰	精良	肥前系
69	磁器	碗 口縁部～底部	空掘跡覆土	9.7	3.8	4.9	施釉 雷輪梅花文	施釉	明緑灰	明緑灰	精良	肥前系
70	磁器	碗 口縁部～底部	空掘跡覆土	12.0	4.7	5.3	施釉 丸文	圏線 蛇の目釉剥ぎ	明緑灰	明緑灰	精良	肥前系
71	磁器	碗 口縁部～底部	空掘跡覆土	—	3.7	—	施釉 斜格子文	圏線	明緑灰	明緑灰	精良	肥前系
72	磁器	碗 口縁部～底部	空掘跡覆土	9.7	3.4	5.1	界線 梅花文	界線	明青灰	明青灰	精良	肥前系
73	磁器	碗 体部～底部	空掘跡覆土	—	4.4	—	施釉 鋸歯状の区画	界線 圏線	明緑灰	明緑灰	精良	肥前系
74	磁器	碗 口縁部～底部	空掘跡覆土	8.5	2.9	3.2	施釉 松竹梅文？	施釉	灰白	灰白	精良	肥前系
75	磁器	広東碗 体部～底部	空掘跡覆土	11.4	6.1	6.5	施釉 山水文	施釉	灰	灰白	精良	肥前系
76	磁器	広東碗 体部～底部	空掘跡覆土	—	6.2	—	施釉 若松文	施釉 圏線	明青灰	明青灰	精良	肥前系
77	磁器	広東碗 口縁部～体部	空掘跡覆土	10.8	—	—	施釉 草花文	施釉 界線 圏線	明青灰	明青灰	精良	肥前系
78	磁器	広東碗 口縁部～底部	空掘跡覆土	—	—	—	施釉 虫籠文	施釉 界線 圏線	明青灰	明青灰	精良	肥前系
79	磁器	碗　蓋 つまみ～口縁部	空掘跡覆土	9.6	4.8 （つまみ）	2.9	施釉 界線	施釉 圏線	明緑灰	灰白	精良	肥前系
80	陶器	碗　蓋 つまみ～口縁部	空掘跡覆土	13.5	3.4 （つまみ）	3.8	施釉	施釉 釉剥ぎ	浅黄	浅黄	精良	京焼風陶器
81	磁器	碗 口縁部～底部	空掘跡覆土	8.4	3.6	5.9	施釉 矢羽根文	施釉 界線 圏線	明青灰	明青灰	精良	肥前系
82	磁器	筒形碗 口縁部～体部	空掘跡覆土	6.8	—	—	界線 半菊文	圏線	灰白	灰白	精良	肥前系
83	磁器	筒形碗 口縁部～体部	空掘跡覆土	6.8	—	—	施釉 格子文 菊文？	施釉 四方棒文	明青灰	明青灰	精良	肥前系
84	磁器	端反小坏 口縁部～体部	空掘跡覆土	—	—	—	蛸唐草	四方棒文	明緑灰	灰白	精良	肥前系
85	磁器	碗 口縁部～底部	空掘跡覆土	10.7	3.7	5.6	施釉 型紙摺り	施釉 圏線	明青灰	明青灰	精良	肥前系
86	磁器	碗 口縁部～底部	空掘跡覆土	10.3	4.1	6.0	施釉 型紙摺り	施釉 圏線	明青灰	明青灰	精良	肥前系
87	磁器	碗 口縁部～底部	空掘跡覆土	10.6	4.2	5.8	施釉 型紙摺り	施釉 圏線	明青灰	明青灰	精良	肥前系
88	陶器	皿 体部～底部	空掘跡覆土	—	7.1	—	無釉 回転ナデ	無釉 回転ナデ	にぶい黄橙	暗灰黄	精良	
89	陶器	皿 体部～底部	空掘跡覆土	—	7.8	—	無釉 回転ナデ	施釉 貫入	灰黄	灰オリーブ	精良	
90	磁器	皿 体部～底部	空掘跡覆土	—	5.7	—	施釉	菊文 点描	明オリーブ灰	明オリーブ灰	精良	肥前系
91	磁器	皿 口縁部～底部	空掘跡覆土	13.0	8.1	2.8	施釉 界線 草花文	施釉 雷輪梅花文 五弁花	明緑灰	灰白	精良	肥前系
92	磁器	皿 口縁部～底部	空掘跡覆土	14.8	8.0	3.6	施釉 界線 草花文　銘款（渦福）	施釉 岩竹文 五弁花	明青灰	明オリーブ灰	精良	肥前系
93	陶器	鉢 底部	空掘跡覆土	—	—	—	施釉	蛇の目釉剥ぎ	灰白	灰黄褐	精良	肥前系
94	磁器	鉢 体部～底部	空掘跡覆土	—	6.9	—	蛇の目凹形高台 界線 施釉	施釉 界線	明緑灰	明緑灰	精良	肥前系
95	陶器	擂鉢 口縁部～底部	空掘跡覆土	27.9	13.4	9.4	施釉 回転ケズリ 底部に砂が付着	櫛描のあと沈線 櫛描条線（１単位19本）	にぶい赤褐	暗赤褐	精良	明石・堺系
96	陶器	擂鉢 口縁部	空掘跡覆土	—	—	—	３条の凹線	施釉 櫛描条線	にぶい赤褐	にぶい赤褐	瀬	明石・堺系
97	陶器	擂鉢 口縁部	空掘跡覆土	—	—	—	施釉 無釉	櫛描のあと２条沈線 櫛描条線（１単位10本）	赤褐	赤褐	精良	明石・堺系
98	陶器	擂鉢 胴部	空掘跡覆土	—	—	—	回転ナデ	櫛描条線（１単位７本）	にぶい褐	明赤褐	精良	
99	陶器	擂鉢 胴部	空掘跡覆土	—	—	—	施釉	施釉 密な櫛描条線	黒褐	黒褐	精良	肥前系
100	陶器	鉢 体部	空掘跡覆土	—	—	—	鉄絵 刷毛目装飾	刷毛目装飾	灰黄	灰黄褐 黒褐	精良	唐津
101	陶器	鉢 体部	空掘跡覆土	—	—	—	刷毛目装飾	刷毛目装飾	にぶい黄橙	にぶい黄橙	精良	唐津
102	陶器	三耳壺 口縁部～体部	空掘跡覆土	13.8	—	—	ナデ ２条沈線	粗いナデ	にぶい褐	暗赤褐	貝殻を多く含む	琉球？
103	陶器	甕 胴部	空掘跡覆土	—	—	—	４条の櫛描文 方向を一にしない タタキ	施釉 当て具痕（同心円）	赤黒	赤黒	精良	肥前系

第３表　石器計測表

遺物番号	層　位	器　　種	計　測　値				石　　材	備　　考
			最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(ｇ)		
11	Ⅳ層	ナイフ形石器	5.62	2.95	1.05	16.30	頁岩	
12	Ⅳ層	角錐状石器	3.42	1.64	1.15	5.80	頁岩	
13	Ⅳ層	掻器	5.12	4.65	2.02	50.90	頁岩	
14	Ⅲ層	掻器	6.25	3.12	0.95	15.80	頁岩	
15	Ⅳ層	石核	5.05	5.50	3.24	72.80	ホルンフェルス	
16	Ⅲ層	石核	2.35	2.04	1.06	4.10	黒曜岩	
17	Ⅳ層	細石刃	0.95	0.55	0.13	0.10	ホルンフェルス	
18	Ⅲ層	細石刃	1.02	0.75	0.30	0.10	ホルンフェルス	
19	Ⅳ層	細石刃	1.73	0.65	0.23	0.10	ホルンフェルス	
20	Ⅲ層	細石核	1.80	2.21	1.18	4.20	黒曜岩	
21	Ⅳ層	使用痕ある剥片	6.53	5.61	1.72	48.60	ホルンフェルス	
22	Ⅳ層	使用痕ある剥片	8.42	7.33	2.78	165.90	珪質頁岩	
23	Ⅲ層	剥片	2.31	1.85	0.54	2.90	頁岩	
24	Ⅲ層	剥片	3.45	3.65	1.91	22.40	珪質頁岩	接合資料１
25	Ⅲ層	剥片	1.72	1.65	0.64	1.60	頁岩	
26	Ⅲ層	剥片	2.81	1.95	0.55	2.90	頁岩	
27	Ⅲ層	剥片	3.45	3.10	2.41	15.70	頁岩	
28	Ⅲ層	剥片	4.48	2.55	1.04	10.90	頁岩	
29	Ⅲ層	剥片	2.15	4.75	1.13	12.00	頁岩	接合資料２
30	Ⅲ層	剥片	1.71	1.64	0.52	1.50	頁岩	
31	Ⅲ層	剥片	2.81	3.30	0.65	6.30	頁岩	接合資料３
32	Ⅲ層	剥片	2.45	1.76	0.63	2.40	頁岩	
33	Ⅲ層	剥片	5.32	5.65	1.61	48.40	頁岩	接合資料４
34	Ⅲ層	剥片	1.75	3.36	0.45	1.90	頁岩	
35	Ⅲ層	剥片	2.05	1.12	0.35	0.90	頁岩	

第４節　上日置城空掘跡におけるテフラ分析

１　はじめに

宮崎県中南部の火山灰土中には，姶良，鬼界，霧島，桜島などのカルデラ火山や成層火山から噴出したテフラが認められる。テフラの中には，噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり，これらとの層位関係を遺跡において求めることで，遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。そこで，年代の不明な石器が検出された上日置城遺跡において，地質調査を行って土層の記載を行うとともに，テフラ組成分析と屈折率測定を行って示標テフラの層位を求め，土層の年代に関する試料を収集することになった。調査の対象となった地点は，第４トレンチである。

２　第４トレンチの土層層序

第４トレンチでは，下位より亜円礫混じり灰色粘質土（層厚５cm，礫の最大径18mm），黄褐色粘質土（層厚５cm，以上７層），亜円礫混じり黄褐色土（層厚14cm，礫の最大径18mm，６層），亜円礫混じり褐色土（層厚８cm，礫の最大径24mm，５層），若干赤みを帯びた褐色粘質土（層厚25cm），若干灰色がかった褐色土（層厚12cm），褐色土（層厚７cm，以上３層），褐色土（層厚２cm），褐色土ブロック混じり灰褐色土（層厚14cm），暗灰褐色作土（層厚12cm）が認められる（図１）。これらのうち，若干灰色がかった褐色土（３層下部）から細石刃が検出されている。

３　テフラ組成分析

(1) 分析試料と分析方法

第４トレンチにおいて採取された22点の試料についてテフラ組成分析を行い，テフラの特徴記載と降灰層準の把握を試みた。分析の手順は次の通りである。

1）試料10gを秤量
2）超音波洗浄装置により泥分を除去。
3）80°Cで恒温乾燥。
4）分析篩により1/4-1/8mmの粒子を篩別。
5）鉱物顕微鏡下で250粒子を観察し，火山ガラスの形態・色調別比率を求める。
6）鉱物顕微鏡下で重鉱物250粒子を観察し，重鉱物組成を求める。

(2) 分析結果

テフラ組成分析の結果をダイヤグラムにして図２に，火山ガラス比分析と重鉱物組成分析の結果の内訳を表１と表２に示す。火山ガラスとしては，試料18にごくわずかながら分厚い中間型ガラス（0.4%）が認められる。試料10より上位では，連続的に火山ガラスが検出されるようになり，試料５より上位の試料に無色透明，淡褐色，褐色のバブル型ガラスが比較的多く含まれるようになる。

重鉱物としては，試料18や試料17でわずかに斜方輝石の比率が大きい傾向があるが（9.6～10%），全体としては比較的下位にある試料に斜方輝石が多く含まれる傾向にある。試料17から試料９にかけては，斜方輝石の比率が高くなる傾向がある。それより上位では，斜方輝石や単斜輝石が多く見られるいわゆる両輝石型の組成となる。

４　屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

第４トレンチの試料22，試料13，試料10，試料５，試料２の５点について屈折率測定を行い，示標テフラとの同定の精度を向上させることにした。測定は，温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）による。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表３に示す。試料22には，重鉱物として斜方輝石や，ごく少量の角閃石が含まれている。斜方輝石（γ）と角閃石（n2）の屈折率は，各々1.701-1.702と1.685-1.688（mode：1.687）である。試料13には，重鉱物として斜方輝石や角閃石が含まれている。斜方輝石（γ）と

角閃石（n_2）の屈折率は，各々1.710-1.725（modal range:1.720-1.725）と1.686-1.688であり，石英も多く含まれている。試料10に含まれる火山ガラス（n）の屈折率は，1.508-1.510である。重鉱物としては，斜方輝石のほか単斜輝石や角閃石が含まれる。斜方輝石（γ）と角閃石（n_2）の屈折率は，1.704-1.707と1.686-1.688である。試料５に含まれる火山ガラス（n）の屈折率は，1.509-1.513である。重鉱物としては，斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石（γ）の屈折率は，1.704-1.707である。試料２に含まれる火山ガラス（n）の屈折率は，1.509-1.513である。重鉱物としては，斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石（γ）の屈折率は，1.704-1.707である。

５　考察

試料22（７層下部）や試料13（４層）に含まれる角閃石，また試料10（３層下部）に含まれる火山ガラスや角閃石については，その屈折率から約8.4～8.9万年前に阿蘇火山から噴出した阿蘇４火山灰（Aso-4，町田ほか，1985，Machida，1999）に由来すると考えられる。試料13に含まれる斜方輝石については，石英も多く含まれていることを合わせると，姶良岩戸テフラ（A-Iw，Nagaoka，1988）や姶良大塚テフラ（A-Ot，Nagaoka，1988）に由来すると考えられる。なお，試料10に含まれる斜方輝石については，屈折率や発掘調査担当者により橙色軽石粒が認められていることを合わせて考慮すると，約1.4～1.6万年前*1に霧島火山から噴出した霧島小林軽石（Kr-Kb，伊田ほか，1956，早田，1997）に由来する可能性がもっとも高いと思われる。

試料５（２層上部）や試料２（１層）に含まれる火山ガラスについては，その色調や形態さらに屈折率などから，約6,300年前*1に南九州地方の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，町田・新井，1978）に由来すると考えられる。なお，斜方輝石については，屈折率からKr-Kbや約7,400～8,300万年前*1に桜島火山から噴出した桜島嫁坂軽石（Sz-Ym，早田，1997）に由来する可能性が考えられる。

以上のことから，本遺跡の３層下部から検出された細石刃については，K-Ahより下位でKr-Kbが混在した土層中に層位があると考えられる。

６　まとめ

上日置城遺跡において，地質調査，テフラ組成分析さらに屈折率測定を合わせて行った。その結果，下位より阿蘇４火山灰（Aso-4，約8.4～8.9万年前），姶良岩戸テフラ（A-Iw），姶良大塚テフラ（A-Ot），霧島小林軽石（Kr-Kb，約1.4～1.6万年前*1），鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，約6,300年前）などに由来するテフラ粒子を検出することができた。本遺跡で検出された細石刃については，K-Ahより下位でKr-Kbが混在した土層中に層位があると考えられる。

文献

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究，11，p.254-269.
新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法．日本第四紀学会編「第四紀試料分析法２－研究対象別分析法」，p.138-149.
伊田一善・本島公司・安国　昇（1956）宮崎県小林市付近の天然ガス調査報告．地調報告，no.168，p.1-44.
池田晃子・奥野　充・中村俊夫・小林哲夫（1995）南九州，姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流　中の炭化樹木の加速器^{14}C年代．第四紀研究，34，p.377-379.
Machida, H. (1999) Quaternary widespread tephra catalog in and around Japan: recent progress. Quat.Res., 38, p.194-201.
町田　洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰－姶良Tn火山灰の発見とその意義－．科学，46，p.339-　347.
町田　洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰．第四紀研究，　17，p.143-163.
町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.
町田　洋・新井房夫・百瀬　貢（1985）阿蘇４火山灰－分布の広域性と後期更新世示標層としての意義－．　火山，第２集，30，p.49-70.
松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗（1987）姶良Tn火山灰（AT）の１４C年代．第四紀研究，26，p.79-　83.
Nagaoka, S. (1988) The late Quaternary tephra layers from the caldera volcanoes in and around Kagoshima Bay, southern Kyushu,Japan. Geog. Rept.,Tokyo Metropol. Univ., 23, p.49-122.
早田　勉（1997）火山灰と土壌の形成．宮崎県史通史編１，p.33-77.

表1　第4トレンチにおける火山ガラス比分析結果

試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	mb	pm(sp)	pm(fb)	その他	合計
1	8	2	1	1	0	1	237	250
2	10	3	1	0	2	2	232	250
3	13	0	1	0	0	1	235	250
4	12	1	0	0	0	1	236	250
5	8	0	0	0	0	1	241	250
6	1	0	0	1	0	0	248	250
7	0	0	0	0	0	1	249	250
8	0	0	0	1	0	0	249	250
9	0	0	0	1	0	0	249	250
10	1	0	0	0	0	0	249	250
11	0	0	0	0	0	0	250	250
12	0	0	0	0	0	0	250	250
13	0	0	0	0	0	0	250	250
14	0	0	0	0	0	0	250	250
15	0	0	0	0	0	0	250	250
16	0	0	0	0	0	0	250	250
17	0	0	0	0	0	0	250	250
18	0	0	0	1	0	0	249	250
19	0	0	0	0	0	0	250	250
20	0	0	0	0	0	0	250	250
21	0	0	0	0	0	0	250	250
22	0	0	0	0	0	0	250	250

数字は粒子数．bw：バブル，mb：中間型，pm：軽石型，cl：透明，
pb：淡褐色，br：褐色，sp：スポンジ状，fb：繊維束状．

表2　第4トレンチにおける重鉱物組成分析結果

試料	ol	opx	cpx	ho	bi	mt	その他	合計
1	3	104	54	16	0	70	3	250
2	2	104	58	11	0	72	3	250
3	0	97	66	21	0	65	1	250
4	1	103	55	9	0	80	2	250
5	0	98	64	11	0	77	0	250
6	0	103	52	17	0	77	1	250
7	0	103	51	11	0	84	1	250
8	0	93	44	10	0	101	2	250
9	0	98	44	21	0	86	1	250
10	0	75	30	31	0	114	0	250
11	0	59	14	41	0	135	1	250
12	0	51	6	35	0	157	1	250
13	0	40	5	75	0	128	2	250
14	0	29	7	68	0	145	1	250
15	0	20	0	73	0	156	1	250
16	0	13	0	73	0	162	2	250
17	0	24	0	65	0	160	1	250
18	0	25	0	52	0	171	2	250
19	0	12	0	57	0	179	2	250
20	0	6	0	84	0	159	1	250
21	0	0	1	93	0	154	2	250
22	0	0	0	106	0	142	2	250

数字は粒子数．ol：カンラン石，opx：斜方輝石，cpx：単斜石，
ho：角閃石，bi：黒雲母，mt：磁鉄鉱．

表3　第4トレンチにおける屈折率測定結果

試料	火山ガラス(n)	重鉱物組成	斜方輝石(γ)	角閃石(n2)
2	1.509-1.513	opx＞cpx	1.704-1.707	-
5	1.509-1.513	opx＞cpx	1.704-1.707	-
10	1.508-1.510	opx＞cpx,ho	1.704-1.707	1.686-1.688
13	-	opx＞ho	1.710-1.725 (1.720-1.725)	1.686-1.688
22	-	ho,(opx)	1.701-1.702	1.701-1.702 (1.687)

屈折率の測定は，温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）による．
opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，ho：角閃石，()：modal rangeおよびmode．

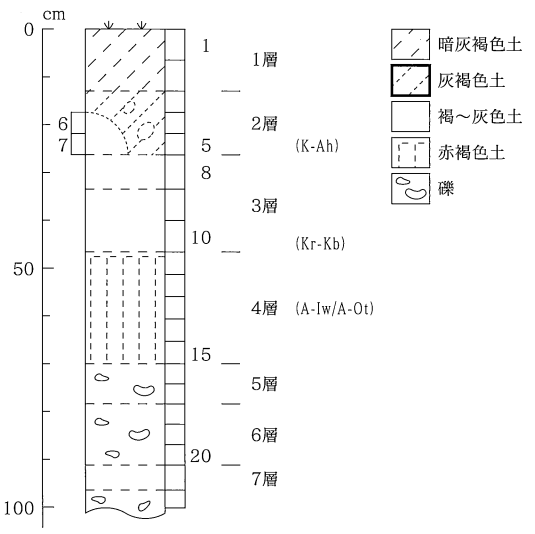


図1　第4トレンチの土層柱状図
（数字やテフラ分析の試料分析）

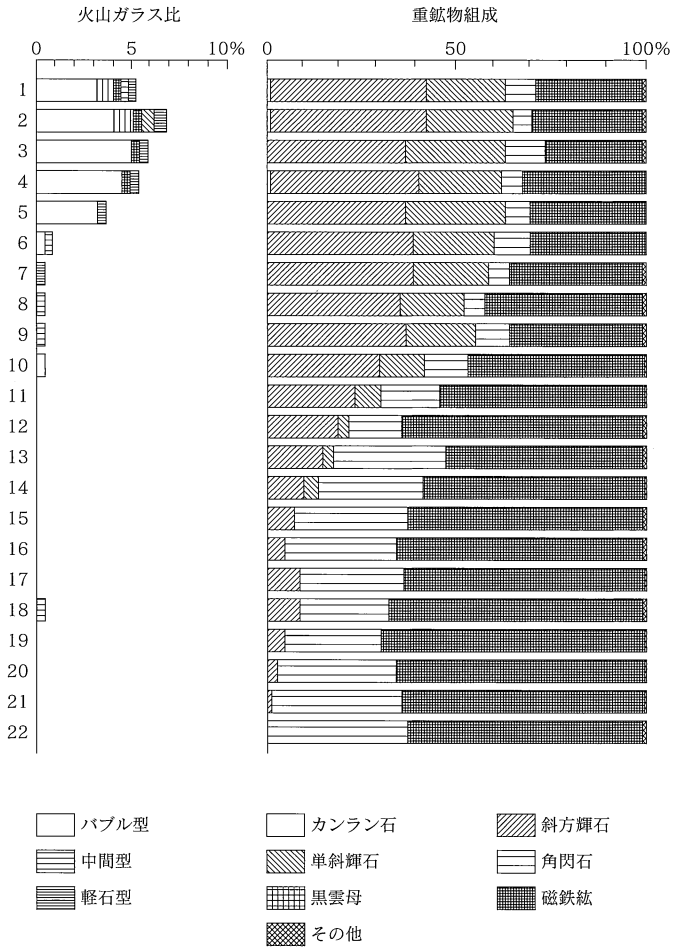


図2　第4トレンチにおけるテフラ組成ダイヤグラム

第Ⅳ章　まとめ

中世の上日置城跡については，その遺構が残っているのみで文書や金石文などにもその名を散見することがなく，この城郭の盛衰を考える上での資料に乏しい。したがって，今回その縄張りの一部を構成する空堀跡を調査し，その旧状および覆土中に混在していた時期的な示唆を与える遺物を確認できたことは，この城跡の存亡を明らかにしていく上で大きな成果であったと言えるであろう。そこで本章では，空堀跡覆土から出土した遺物をもとに上日置城跡が存続した中世について考えるとともに，空堀跡上部平坦面で遺物を確認した旧石器時代についても若干の知見を述べまとめとする。

1　中世の上日置

上日置の地名のもとになった「日置」の初見は，建久８年（1197）の「日向國図田帳写」の児湯郡内に見える「倍木 三十丁」である。地元で今なお日置を「へき」と呼称するのはそのためであり，当地が古くから支配構造の中に取り込まれてきたことは確かであろう。

しかし，今回の調査した上日置城跡については前述したとおり文献等でその時期的な裏付けを取れない。そこで，今回確認された10点の中世の遺物についての編年的な年代観について考えてみる。日常雑器として中世の城郭跡などからは比較的まとまった量が出土する傾向が見られる土師皿および坏は，今回はその出土数が少なく細片などもそれほど多く覆土中にも混在していなかったが，器形および調整の特徴からは，概ね14世紀以降の年代を想定できる。また，陶磁器については，中国産の青磁と染付が１点ずつと備前焼の擂鉢と壺が出土しているが，このうち青磁の丸碗については14世紀代以降，染付については16世紀代と位置付けられる。また，備前焼の遺物については15世紀代前半に位置付けできる。時代考察をする遺物の絶対数が不足していることは歪めないが，遺物の様相としてはおおよそ15世紀から16世紀の時代幅に収まってくるものと考えられる。

次に，城郭遺構としての上日置城跡についてであるが，これについては第Ⅲ章の第１節に詳しく述べたとおりである。しかし，このような小規模城郭がどのような理由でこの台地縁辺に築かれたのだろうか。一般的に在地領主層が築いた小規模な城郭は，館的な性格をもつものを除いては領地を見下ろせる場所や交通の要衝を押さえる場所を城地として選択していることが多い。しかし，この上日置城跡の城地はそれらの選択理由を排してあくまで防御を第一義に見据えた城地の選定となっていることが注目すべき点である。周辺地形に見られる深く入り込んだ浸食谷の谷底に広がる狭隘な低地は生産性も低く，一部では台地からの湧水を集めて湿地化しているところもある。したがって交通路としての可能性も低い。その反面，防御という観点からはその谷底を見据えることができる場所であり，台地上への経路も限られてくることから理にかなった選定といえる。これらの事実を考慮すると，この城跡の性格としてはこの台地上に生業を求めた人々のための砦的な性格をまず想定すべきであり，いわゆる村の城的な存在であったと考えることができる。

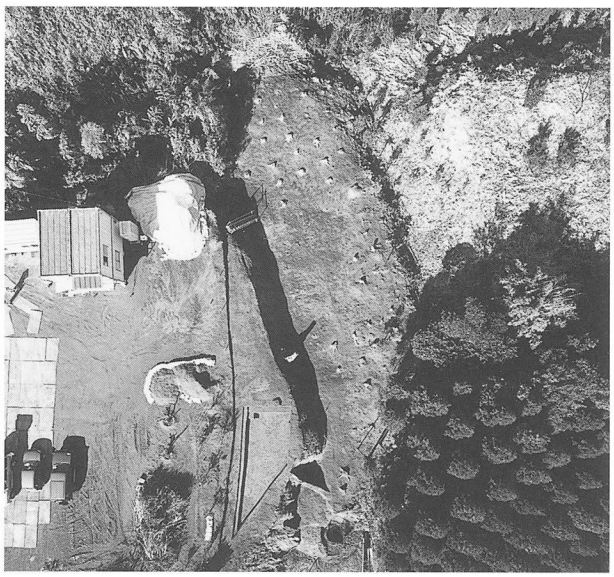
2　旧石器時代

今回の調査面積は狭小なものであったが，後期旧石器時代の文化層を確認し一定量の石器や剥片等の遺物の出土を見たことは洪積台地である新田原面上における当該期遺跡の東側への広がりを知る上では大きな成果となった。また，ブロック等の検出はできなかったものの整理段階で４点の接合資料を確認したことも，調査区において石器製作が行われた可能性を指摘するものとなった。

以上，中世と旧石器時代について述べたが，上日置城空堀跡の覆土からは中世陶磁器のほかにまとまった量の近世陶磁器が出土している。現在の上日置公民館がある敷地には明治初期まで日置村の戸長役場が置かれており，同村内では中心的な場所であったと思われる。また，戸長役場がこの地に置かれた理由としては，その前身となる何らかの施設が存在した可能性を指摘することができるのではないだろうか。推量の域を超えないが，近世初頭の17世紀前半から明治期まで間断なく繋がる遺物の様相からその点を指摘しておきたい。

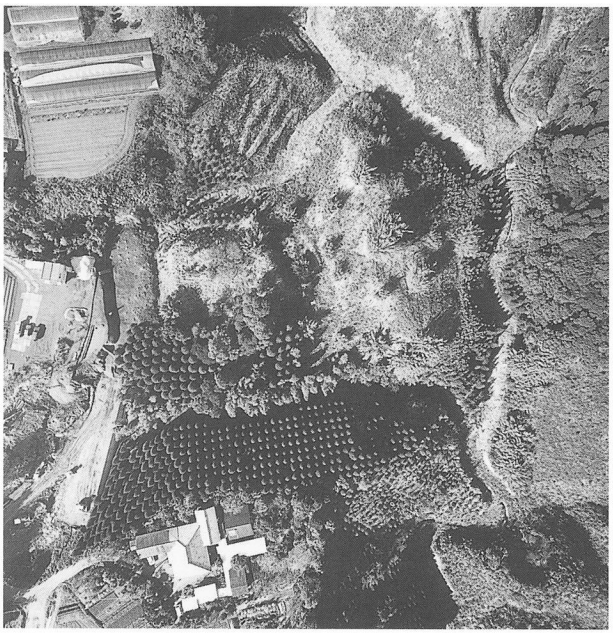
上日置城跡全景（西上空から）

上日置城空堀跡近景（北西から）



上日置城空堀跡全景（垂直）

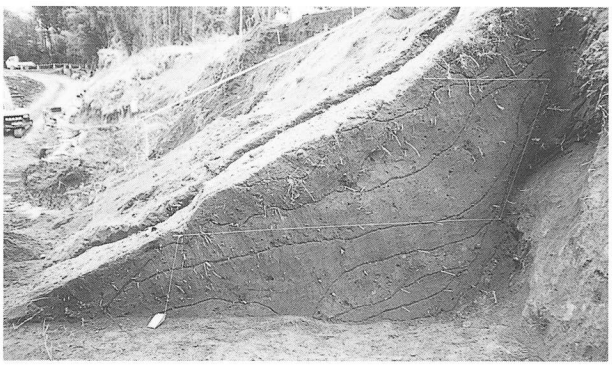
図版2



上日置城跡全景（垂直）

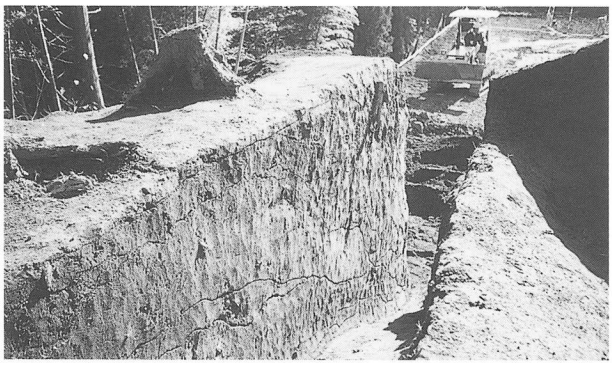
曲輪Ⅰ（主郭）の切岸

空堀跡法面の覆土除去作業風景



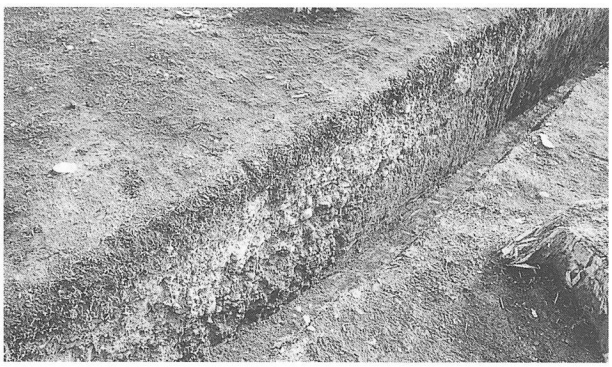
空堀跡法面の覆土状況（T_3付近）

空堀跡法面の覆土状況（堀底南東端部付近）

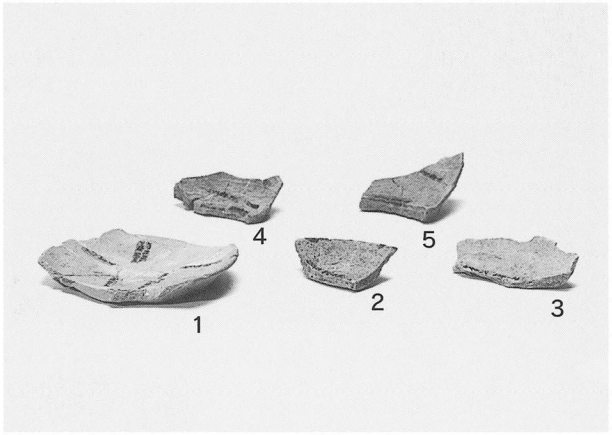


堀底南東端部の造成土堆積状況

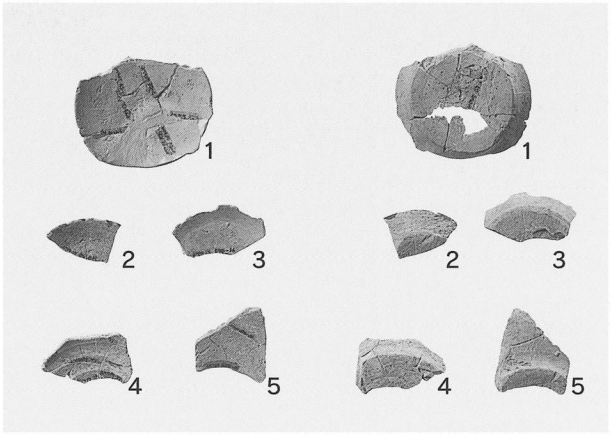
堀底北西端部の造成土堆積状況（北西から）



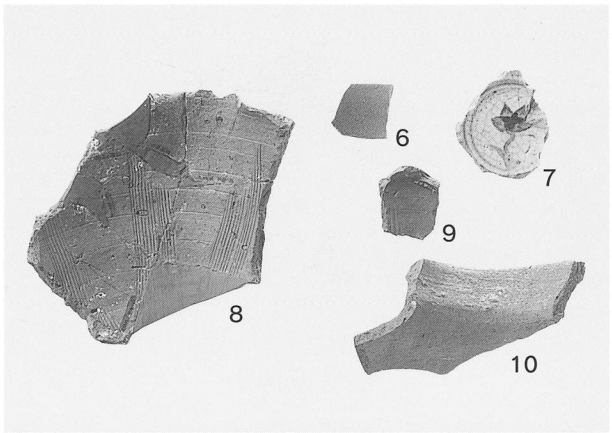
堀底北西端部の造成土堆積状況（斜め上から）



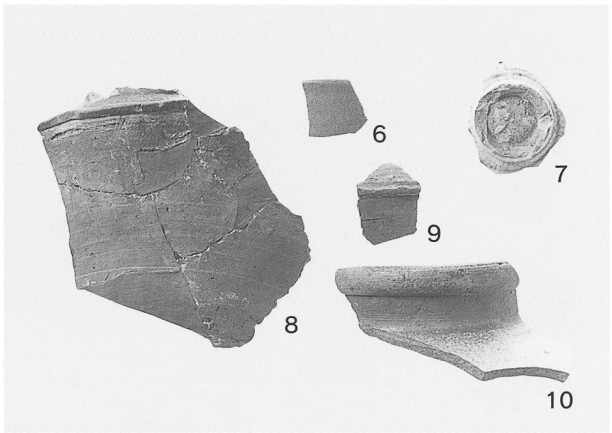
土師器（小皿・坏）



土師器（左：内面，右：外面）



中世陶磁器（内面，擂鉢・青磁・染付・壺）



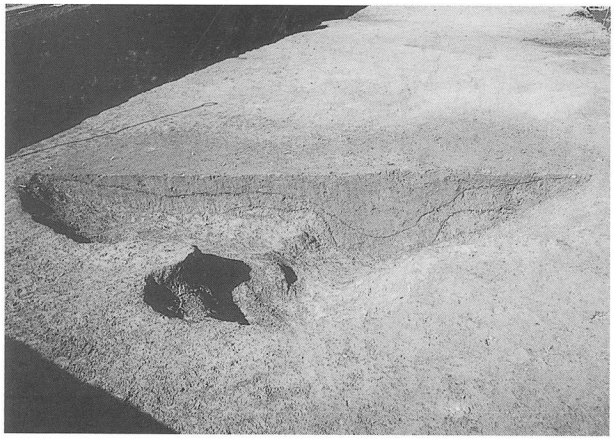
中世陶磁器（外面，擂鉢・青磁・染付・壺）

旧石器時代の調査範囲（垂直）

第４トレンチ土層堆積状況

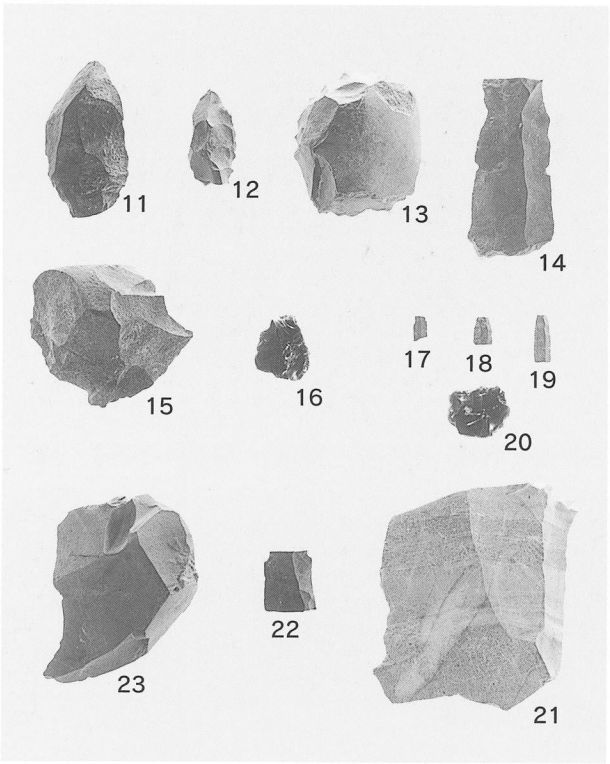
石器等出土状況

図版4

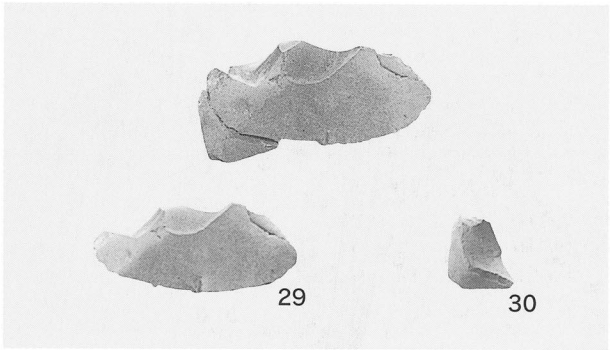


土坑埋土状況

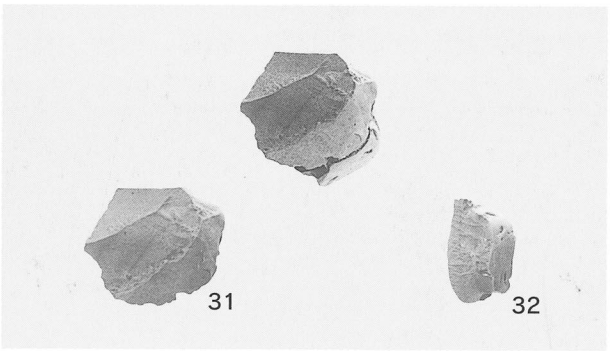
土坑完堀状況



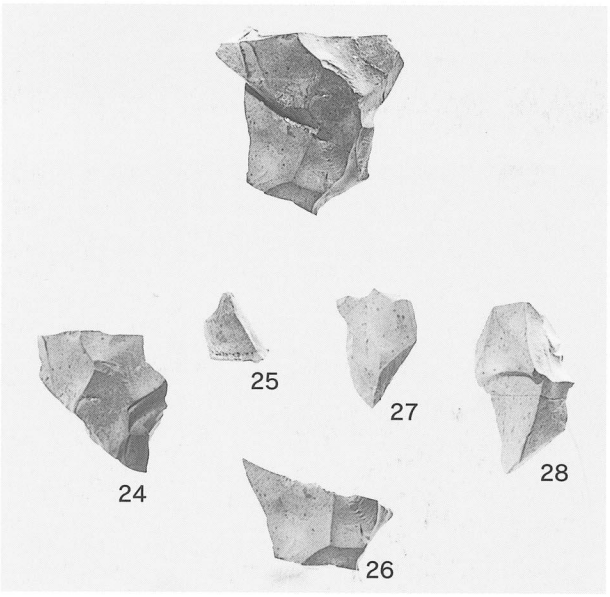
空堀跡上部平坦面出土石器



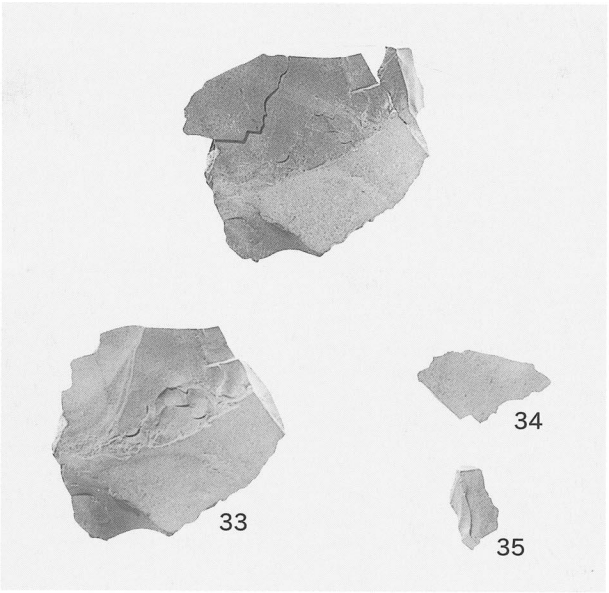
接合資料2



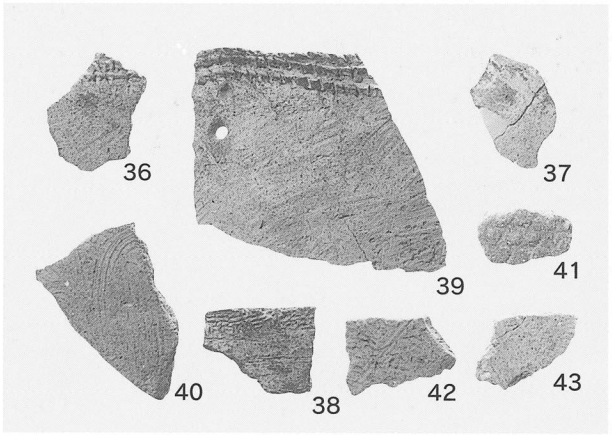
接合資料3



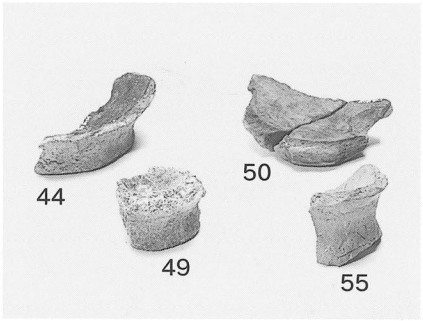
接合資料1

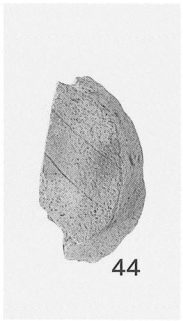


接合資料4

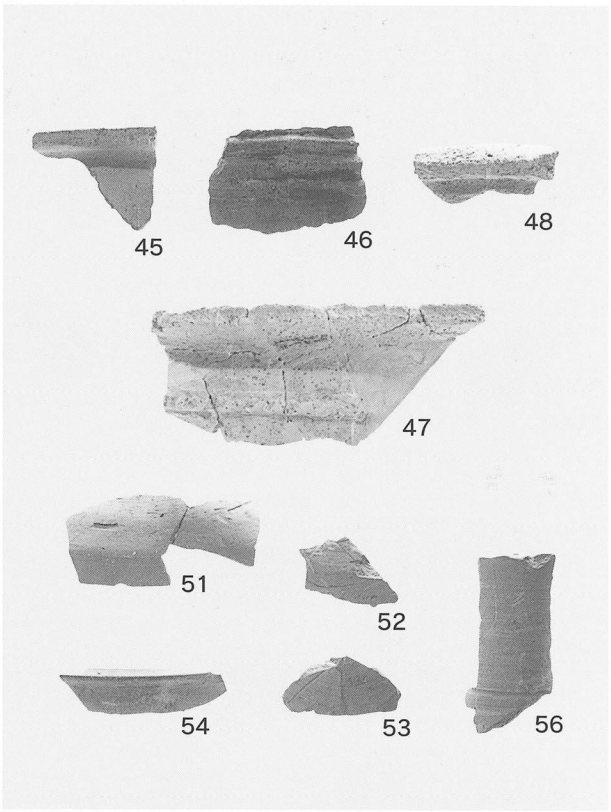


縄文土器

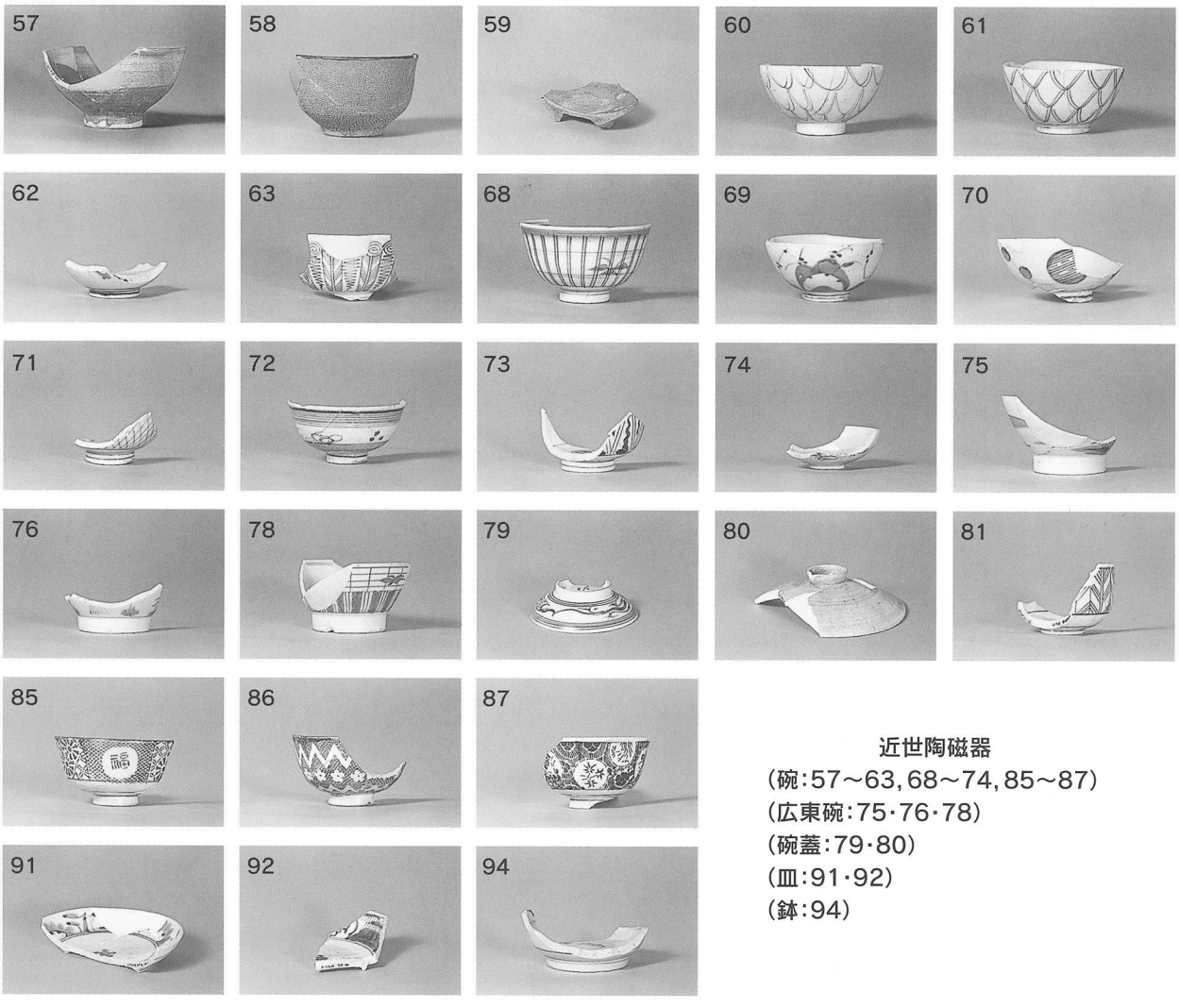




底部一括資料（縄文土器・弥生土器・土師器）

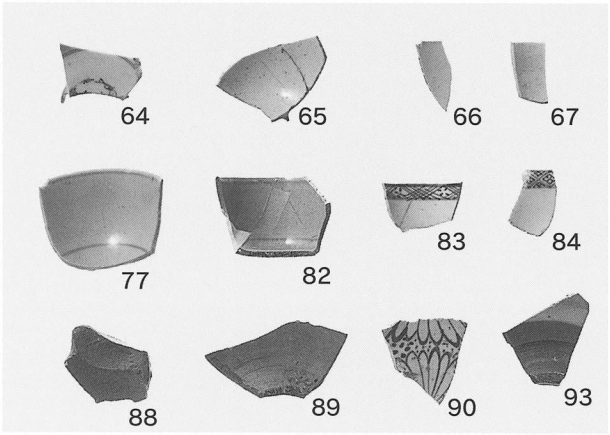


弥生土器および古墳時代の土師器・須恵器

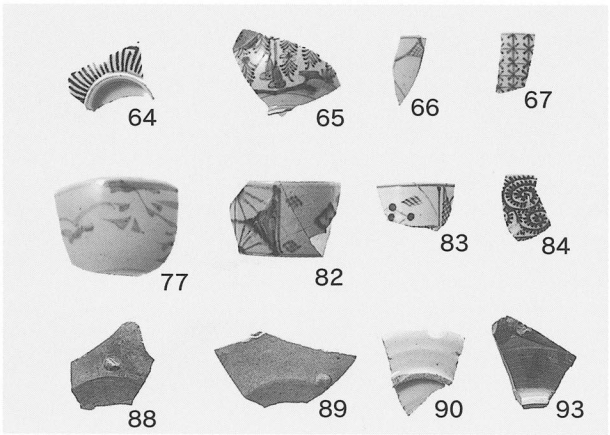


近世陶磁器
（碗：57～63, 68～74, 85～87）
（広東碗：75・76・78）
（碗蓋：79・80）
（皿：91・92）
（鉢：94）

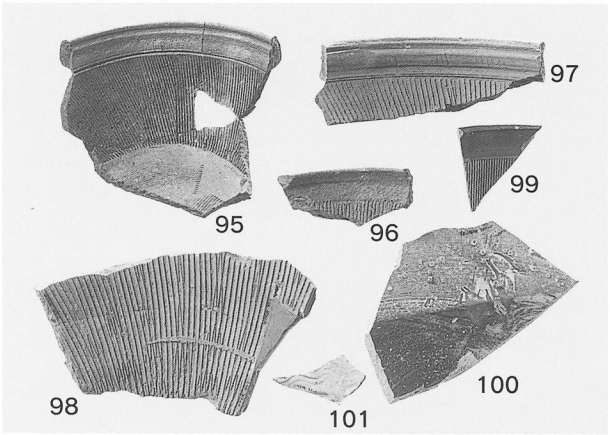
図版6



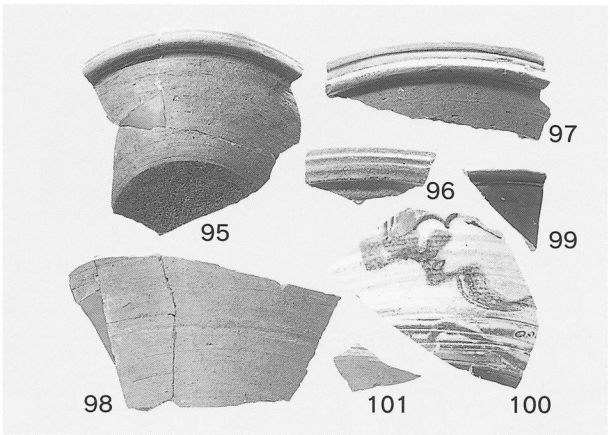
近世陶磁器（内面，碗・皿・鉢）



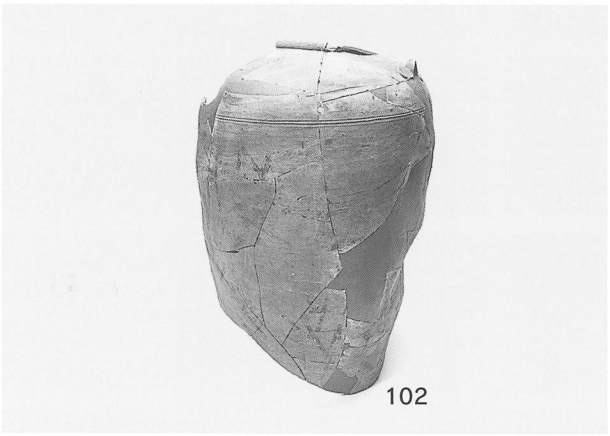
近世陶磁器（外面，碗・皿・鉢）



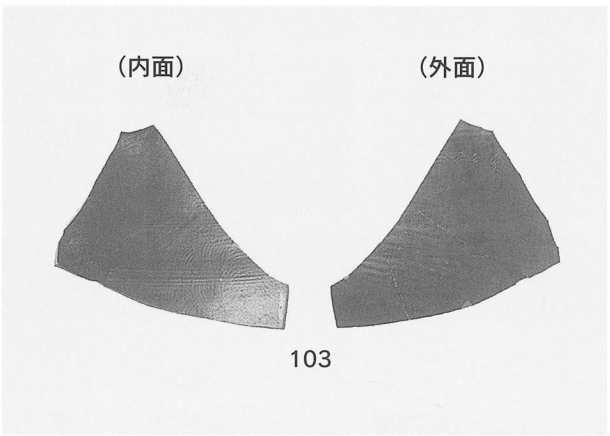
近世陶器（内面，擂・鉢）



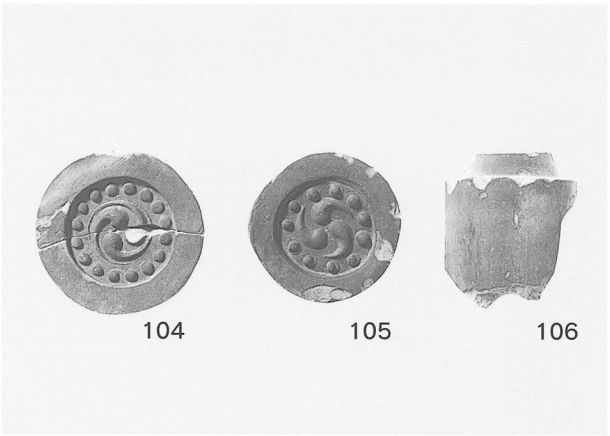
近世陶器（外面，擂・鉢）



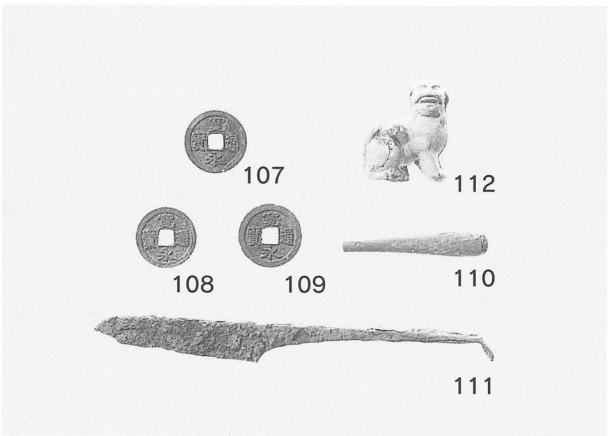
近世陶器（壺）



近世陶器（甕）



瓦（瓦当，軒丸瓦）



銭貨・土人形・金属製品

報 告 書 抄 録

ふりがな	うわべきじょうからぼりあと
書名	上日置城空堀跡
副書名	一般県道日置南高鍋線地方特定道路整備事業(上日置工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第68集
編著者名	福田泰典
編集機関	宮崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒880-0212　宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地
発行年月日	2003年2月28日

所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
うわべきじょうからぼりあと 上日置城空堀跡	こゆぐんしんとみちょううわべき 児湯郡新富町上日置 コード 市町村：45402　遺跡番号：	31°40′22″ 付近	131°01′48″ 付近	2000.10.23 ～ 2001. 1.30	790㎡	一般県道日置南高鍋線地方特定道路整備事業（上日置工区）

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山城	旧石器 中世	(旧石器) 土坑１基 (中世) 空堀跡	(旧石器) 掻器･剥片･接合資料 (中世) 土師器･陶磁器	・後期旧石器時代の文化層を確認 ・空堀跡の覆土から多量の近世陶磁器などが出土

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第68集

上日置城空堀跡

一般県道日置南高鍋線地方特定道路整備事業（上日置工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成15年2月28日

発　　行　宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212　宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地
TEL0985(36)1171　FAX0985(72)0660

印　　刷　北一　株式会社
〒880-0903　宮崎市太田３丁目1-31
TEL0985(51)5100　FAX0985(53)5640